川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十四年二月二十五日　印刷
昭和四十四年三月一日発行　（毎月一日発行）
（第四十二号）

No. 42

特集・女流作家から男性選者へ

三月号

えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛

超特撰（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一、四一〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘 西宮酒造 醸

料理も電話も 551 ここがいちばん
TEL（641）551-2

広東料理・焼餃子
豚饅 蓬莱 焼売
大阪なんば
◆出張販売店◆
なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

憶病傲慢それでおしまい私です

エスカレーター妻を一段上におき

大臣室陳情時間を秒読みす

手ごたえあって小首かしげる陳情団

大臣室大臣は肩のこる姿

中島生々庵

今月のことば

巌谷小波の「しじみの竜宮行き」という童話がある。兄弟しじみのうち末っ子は上の長兄や次兄のように飛魚に跨ったり蟹の背に乗ったりせずにぽつぽつ歩いたので、飛魚の行き過ぎや蟹の横ばいのように眺めるだけでなく立派に竜宮城に行きつく事が出来たというのである。

世の中が大きく描く渦巻の中に巻き込まれ一見全く意味のない繰返しと思われる明け暮れの中で、自分を見失わず、営々と続ける末っ子蜆の努力がほしいものだ。ひたすらに念仏申せば必ず救われるという他力本願の易行はともすると歪められて受取る危険がある。又集団の図体が大きいとか、過去の歴史が七光りしているとかが「自分」の進むべき方向に約束しているかの如き感覚が万一にもありとするなら狐の嫁入りであろう。傷つき易く悩みも多い夢を恐れることなく驀らに進むだけがわたしの道である。永平寺の道元が天皇から頂いた紫衣を、山の猿に笑われるといって一生身につけなかった気持がわかる。

川柳塔三月号

川柳塔三月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青……中島生々庵…(1)

今月のことばと句帖……中島生々庵…(1)

川柳塔…(同人作品)……中島生々庵選…(4)

悲劇の人……橘高薫風…(2)

川柳日記……麻生葭乃…(29)

川傍柳初篇研究…(六十九)……(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

秀句鑑賞……後藤梅志…(30)

川柳徳川記…(三)……冨士野鞍馬…(44)

孤独……高鷲亜鈍…(28)

スター走馬灯大陸版…(大陸巷談)……東野大八…(42)

私論・柳論

悲劇の人

春の艸代議士などに踏まれるな

路郎

ものの芽の、芽ぶく三月になった。身ぬちにおのずからなる力の漲るのを覚えるのもこの時季である。長い冬に耐えたもののよろこびが堰を切ってあふれ出る相を見ていると、路郎先生の沈思黙考の姿が思い浮かんでくる。

先生は生前よく、「大事は十年沈思して練り、然る後実行に移すことだ。」と門下生に教示されていた。ひとたび実行に移すや、雑草の萌え出ずる勢の如くとどまることを知らぬ風であったのも、長い沈思の期間があったればのことであろう。

路郎忌は七月七日、柳界衆知の事実である。昨年はせんば川柳社の二十周年記念大会とかち合って双方はがゆい思いをした。今年ま

白　黒　記……橘　高　薫　風…(46)
川上三太郎先生との出合い……直　原　七　面　山…(46)
女流作家から男性選者へ…(同人特集)……(22)
山川　阿茶・久米奈良子・三井　酔夢
内藤きさ子・西出　一栄・天正　千梢
これはまた……桜　川　不　水…(53)
近作柳樽……西　尾　栞　選…(32)
雅号ぶっちゃけばなし……菊　田　いさむ…(59)
初歩教室……菊　沢　小　松　園…(50)
大萬川柳「重役」……清　水　白　柳　選…(52)
★柳界展望……(薫風)…(54)
★本社二月句会……(庸佑)…(56)
★各地柳壇……(文秋)…(60)
「切手」……山　本　立　児　選…(48)
一路集「芽」……間　島　青　丹　子　選…(48)
「人情」……直　原　七　面　山　選…(49)
★編集後記……(一三夫)…(65)

た七月六日の日曜日にふあうすと川柳社の四十周年記念大会が開かれることになり、われわれは再度臍を噛む思いをさせられるのである。

それも、去年の今年である。

先生の沈思から生まれた関西短詩文学連盟のほかに並設された、関西川柳作家懇話会は、人の和を第一の信条としているのだが、昭和四十二年の暮れの発足以後に、かえってこのようなことが二度も出態しているのは皮肉なことである。今後、春季秋季の各都市川柳大会の日程などをも、前もって主催者間で調整を行い、浅慮の失態はこれ限りで川柳界から無くしてしまいたい。

冒頭の句に表われている先生の野党精神が、三月の私の心にしみ渡ってくるとき、誠に身心爽やかなものを覚えるが、つくづく先生の晩年を思い、死後を思うと、先生はまさに「悲劇の人」と云うことが出来るようだ。

（橘　高　薫　風）

中島生々庵選

物思いしてかゆっくり枯葉落ち
しまい風呂星空へ干す洗いもの
再婚の誓詞心を逆なでし
嘘つけと声ありそうな誓詞読む
破損した脳のパーツがほしくなり

大阪市　山川阿茶

妹が歯痒がる程敷かれてい
おおように笑ろて妥協はせぬつもり
働かな食えぬ老い先き羨やまれ
酒代のかわりのような薬代
金策へ影もしょぼしょぼついて来る

新居浜市　安藤桂仙

お茶席の端座しばらく笑いあう

大阪市　正本水客

いちにちが終る銚子を振ってみて
さり気なくさり気なくお茶いれている
寿司を巻く妻の手を見ている静か
君の嘘ぼくのうそ四つに組んでみて笑う

下関市　石川侃流洞

底ぬけに明るい性の丸い鼻
呼び捨てで呼ぶのも愛のテクニック
誘惑へちょっぴり乗り気旅にいる
玉砂利の寿ほぐリズム初詣
お守りの巫女の座った方が売れ

大阪市　本多柳志

宝石に頼る余生にある不安
節を曲げてまで従いて行く社ではなし
買う意志のないのへ買わす無駄話

振り向けば宇宙時代の初明り
書き初めへ恥を残さぬ墨をすり

岡山県　浜田久米雄

また明日があるさと胸に手を当てる
反省の涙は乾き切っており
家計簿をごまかしておく無駄使い
年甲斐もなく大きめのグラス取る
言葉にはならず入れ歯を持ち上げる

倉敷市　本田恵二朗

十八番見せず負けてる顔でいる
目が肥えてから高うつき高うつき
ママの顔上手に画けた初笑い
初忘れ煮豆真黒けにこがし
餅六つぺろりと六十三の初春

（2月25日交通事故で急逝）　岡山市　服部十九平

運のいい奴だと実力にはふれず
三面が少年Aで師を泣かせ
政治家と政治屋貴賤の別がありぎっちょが右と左を間違える
ぜんざいの甘さが塩の味で生き
月よりの使者は無いのがはっきりし

青森市　工藤甲吉

めちゃくちゃにただ石投げる人かなし
生ける屍の如くにむっつり屋
ミニスカートわなわなわなと雪が降る
ひねもすの吹雪ひねもす閉じこもり

高槻市　傍島静馬

三カ日すんで気まずう来た賀状
ショッピング妻のため息聞きながら
孫と相撲ほんとうらしく負けてやる
ご近所をけなるがらせた旅土産
凍てる朝犬も散歩をずらされる

豊中市　戸田古方

一月一日一月一日だけのこと
三カ日晴着に似合う顔がない
人間回復僕のとちっとずつ違い
ここいらで又も蒔絵のお正月
喜怒哀楽ほかのお顔もしてみせる

愛媛県　渡辺暁童

四十年柳人回想

赤松の茶掛けへ偲ぶ山雨楼
東北弁葉書にもあり緑雨さん
眼帯の白さに道田葉平氏

一騎当千たまむしを守る人
無理をきく顔に豆秋出来ており

東大阪市　久米奈良子

除夜の鐘どこへ行くのか救急車
　アポロ八号打上げ
茶の間から地球を望む年の暮れ
君すでにハイミス対策の一人なる
ふき上げる炎へ心よぎる影
鏡掛け古び女の歴史知る

大阪市　橘高薫風

淀川の水滔々とお元日
冬夜の凍て愛恋の書も真理の書も
恋の句を刻まれし碑の濃陽炎
年を越す真珠一粒噛みこんで
　悼　川上三太郎先生
死を悼む旅なるに富士美しき

大阪市　後藤梅志

　ガンが治った話
聴かされた癌五年目の戎べっさん
反骨の命無茶苦茶ばかりされ
世渡りの逆を行ってる好き嫌い
マヒ剤を貰い神経痛治り
ワキ役が饒舌りちらしているテレビ

大阪市　不二田一三夫

くどくどと手紙のような雨が降り
盲人の証言その嗅覚を重視する
法灯のボスに信徒が二分され
　寄席（二句）
人気とは「めくり」見てさえもう笑い
一人になれば芸人目を伏せる

笠岡市　木山遠二

弱いので敗けて勝つより他はなし
老人の日の老人は手がかかり
魚釣の出来るところへ左遷され
情の判決傍聴をホロリさせ

奈良県　麻生アート

人間よ大きくなあれアポロ8
利いたふうな抱負を並べスターです
戎さん山入れはって雨になり
万年床テレビの方へにじり寄り

松原市　谷垣史好

気がつけば良心にも白蟻が巣食い
一病息災他人はのん気なことを云う

りきゅう下駄けな気に生きる響きかな
窓硝子拭けばこんなに深い空

八尾市　高杉鬼遊

心地よく床屋の椅子で寝る師走
自動車の来ない冬山雪が荒れ
かたくなは出世の友を訪ねない
転居先不明の賀状友何処

枚方市　宮川珠笑

特級にもったいなくも酔いつぶれ
すがられた方がてれてる人違い
来客が妻の自由を奪いに来
付き添いも病人らしく順を待ち

岡山県　藤原秋月

合併が議員の任期のことでもめ
雪の道二の字二の字はもう見えず
春の風バイクも覆面はずしとり
ふたとおりある診で口答え

今治市　越智一水

元日も働く僕にあるほこり
松の枝みなたれていてある威厳
元日も妻に針もつ用が出来
寄り添うてあるけと春の雨は降り

高槻市　若柳潮花

半分はすけてもらえる猪口をうけ
肩すべるように羽織をぬぐ女
喪の新春を師匠としての舞い扇
爪弾を皮肉に聞いた置炬燵

大阪市　西出一栄

一本の煙草に知恵を引き出させ
花のない花瓶に家計のぞかれる
法善寺水かけ地蔵ふるえてる
おだてたら糸切れるまであがる人

出雲市　尼緑之助

なすすべを知らず泡泡と教授
ゲバ棒の理論ゲバ棒の上を出ず
エリートの自瀆足許からくずし

東京にて

青空が少しよどんで娘の下宿

愛媛県　村上旭童

ない袖は振れずしまり屋とも言われ
賀状だけきっちり出して親と子と
なにもかも代議士さんのお蔭です
やめられても困りなめられても困り

竹原市　小島蘭幸

手土産は無駄に終った阿呆らしさ
泣いて勝つこと末ッ子に覚えられ
テープレコーダーが笑ったとこでまた笑い
父がいて母がいてここまで来た人生

熊本県　有働芳仙

振袖のどう動いても美しい
温室でだまされて出る小ちゃい芽
つり革へ言い負けてきた口喝き
スリッパを出されて借りる気が遅れ

島根県　藤井明朗

正月からの雪へ庄助さんになり
仲人へ年始仲のよさを見せ
一合の晩酌酔うた振りをする
年始廻り嫁の話も決めてくる

鳥取県　田中蛙眠子

雪折れた竹音無しの構えして
デスクプラン帯にも襷にもならず
換気扇悲しく泣くなり十二月
酒うまし温泉(ゆ)もやへ雪は消えて降り

岡山県　坂井三葉

新調の靴が離農の足を噛み
豊作が大臣閣下の気に入らず
値切られて笑える間はまだ儲け
健康な人だと靴ベラ知っている

鳥取市　河村日満

とは言うてみても惚れてる同士の目
ボーナスをゴソッと貯金するも妻
内祝犬にも頭付きの骨
実績が酔ったにさせぬ猪口もらう

岡山県　田村藤波

諸行無情財布は嫁のものになり
一応は折目をつけた大晦日
追い越されまい足どりの初詣で
笑う日を信じて貢ぐ学資金

鳥取市　藤本礎山

プライドをすててからある平和な日
二十五年前を哭かせに来た叙勲
回り道したと気付いて家業嗣ぎ
妬きもちを混ぜた祝辞へ湧く拍手

松江市　中川晃男

とりどりの鳥

神社仏閣の宗旨は問わぬ屋根の鳩
悪口を先に覚える九官鳥
スモッグの空見て籠に棲む小鳥
青い鳥追うている間に皺が寄り

宝塚市　中村ゆきを

カロリーの割には味がついてけず
よい方にとって暮すのも秘訣
打算から出た親切の息が切れ
案の定一番高いメニュー指し

大阪市　大坂形水

脱線が出てテーブルも打ち解ける
モーニング着てわたくしを不在にし
正月のフィナーレになる戎さん
煙草屋で小銭に替えるお賽銭

大阪市　金井文秋

倖せすぎると思ってた日も妻にあり
妻だけが染めて私に染めさせず
悲しみを抱いて異常な程笑い
云いたい事やめておきたい酒もあり

和歌山市　西尾公作

残り福飴投げ売りと書いて売る
妻そばに居ればパチンコよう入り
踏切番天職として明るい日
冷凍えび寄り添い故郷恋しがり

倉敷市　藤井春日

悪業の果を鑿とる観音像
お隣りのピアノへ挑戦するオルガン
マイダーリンなどと平和な恋女房
大学の兄へ中卒仕送りし

京都市　都倉求女

本心の底まで熱燗しみわたり
今日もまた鏡は辛抱して写し
真直ぐに歩けば雪まで当りに来
奇遇奇遇晴着同士がとび上り

堺市　青野遊仙

性分を見せて四人の娘の歳暮
芋で育った娘がかびの餅捨てる
四十年やっとわが家の味の良さ
拾われてお礼の金が惜しくなる

大阪市　河井庸佑

ぜいたくな迷い二校とも合格し
春夏秋冬遊ぶプランはうまく組み

おみくじの吉の割にはついていず
遭難は人ごとのよう山へ行き

岡山県　直原七面山

崩れゆく理性の中で燃ゆ二人
OKとは言わず飲みたいわ飲みたいわ
失恋のいきさつを妓聞きたがり
貧乏の良さ説く友をバーに連れ

名古屋市　吉田水車

動くものみんな動かす十二月
明治一〇一年そろそろ借り着脱ぐもよし
世も末とおもうなかにも春は春
運勢の吉に追われて靴を履き

大阪市　中川滋雀

差出名忘れた賀状も来てのどか
つり皮を持てと危険を仄めかし
あほらしさ定期忘れた日の切符
快哉を押えライバルの死を悔み

京都府　大鶴喜由

チャスラフスカここが引きどき嫁ぎとき
二対二で逢うて一対一で歩き
結婚に連らなる恋は欲があり
サラブレットに似た血統が角棒振る

大阪市　酒田清子

元旦の白衣の勤務まぶしく見
パジャマなど新に着替えて寿がん
貧亡神と病の神の板挟み
　隣室の患者さんに
御寮はん船場のド根生出しなはれ

岡山県　池田古心

あやまちがあり人生の面白さ
日に一円貯める俺の生涯よ
稼ぎより薬代嵩む俺となり
焼鳥にされる因果の雛かえり

京都市　松川杜的

　紀三井寺順拝
三つの井戸後の二つは見ず戻り
見下ろして見上げて海の青　朱の御門
　粉河寺順拝
マイカーにすねてるように武家屋敷
徳川の権威を偲ぶ屋根の反り

芦屋市　丸川初甫

よいニュースありませんかと如才なし

桐蔭席

杉苔のしめりへ飛石影を持ち
敷松葉初冬の庭に温し
とっぷりと暮れて桐蔭席の山気

神戸市　仲　どんたく

グラス掌に一年終る鐘を待つ
木枯しに並んで当てた飴一つ
大正の郷愁に泣く枯すすき
父の墓前オーマイパパ子と歌う

竹原市　山内静水

折角の散髪制帽の型がつき
自動扉のように話にのってくれ
ささやかなおごりお茶でもたてましょう
造花のような女がしたあくび

岡山県　浜野奇童

引き裂いてやりたい答を電算機
当然やないかと先輩笑うだけ
真心のない柏手と神は聞き
星と私語できる倖せ山に住み

藤井寺市　西　いわを

一刻一針形なすもの創り出し
空の広さへ抵抗するものがない
見るものの心のままを受入れて
病みつづけ背負いつづけで重い石

下関市　桜川不水

お手を拝借いざなぎ景気の手が揃い
加減乗除しても答の出ぬ晦日
二歩さがり一歩出てみるおそれ犬
痩せっぽち太っちよ病院は人の市

ハワイ　羽佐間柳葉

女物へ自制忘れた腹具合
横車ソ連が押せば皆通し
里帰り朝寝をそっとしておくれ
落ぶれて前歴なんて野暮な事

美禰市　安平次弘道

チャンス今紳士の仮面脱げと云う
補育器に生きる尊さおしえられ
前例がないと進歩のない姿
単純な仕事へ精薄の根気

大阪市　神谷凡九郎

うらぶれの肩に見つけた人間味
人間を否定し主義だ主張だと

右向け右の時代に人があったっけ
見渡たせば皆ロボットに似てる人

大阪市　児島与呂志

又家を買うた話を聞く師走
話中断山いもそえて酒が来る
銀行が又建築中平和なり
本物なのよとさわらせてくれ

大阪市　石倉旅風

連れだって来た同窓の友
嘘の無い話しに来た同い歳
古い家借家住いを気に入られ
衣着せぬわが人生を見てもらい
また会おうどの掌も同じ言

大阪市　天正千梢

思想ありげ大輪懸崖さしむかい
燃えきって空白の後平行線
科学を信じ自動エレベーターに一人乗る
ワキ役は炬燵に入り果報待つ

西宮市　若林草右

明治村を訪う

チンチン電車乗れば昭和の電車賃
歩兵銃殿汗と涙で錆び給い
票田は下る米の値下げさせず
カメラマンなかなか切らせぬこのテープ

大阪市　水谷竹荘

招かれて来ても女は手伝う気
伊勢詣りかねてホテルで年を越し
一万円八ツに折ってへそくる気
酔わぬうちに踊りなさいと黒田節

大阪市　福井多蘭子

暮れ

薬湯の匂いにすがり年送る
暮れ済まし残った金を大事にし

新年

念仏だけ寒林にこだまし明けかかる
去年から今年へ仏のそばに座し

平田市　久家代仕男

素人に釣れてたまるか魚師の竿
困ったという溜息の口車
借財を抱いて泳いでいる強気
機関車の煙が絵になる雪の坂

和歌山市　野村太茂津

貧乏も楽し霰が屋根を叩きおる
諦めたと云う先輩の保身術
脊伸びして足払い喰う悟りです

世に疎い男に生れ餅を焼く

富田林市　川端東雲楼

よりそって歩けど所詮右左
酔うための酒に酔うなのむずかしさ
亡妻眠る無縁墓所の霜柱
　アポロ八号の示唆
本当の密月旅行夢ならず

大阪市　木村水洞

寝正月してても長屋喧しく
年齢の順にわが家風邪をひき
黒線を引いて侘しい住所録
それぞれの欲で賑う戎さん

門真市　福島鉄児

手を握るだけの恋でも信じ合い
云うだけは云うて相手を打診する
その訳を聞く程野暮な僕でなし
義理で来たお通夜すらすら物が云え

奈良市　村上春巳

七草にひょっこり年玉取りに来る
もの想うともしびつけてくれたひと
山焼のまだ燃え残る火がひとつ
恋してる二人へ遠く山焼ける

倉敷市　奥谷弘朗

無いものと思って貯めるコツを知り
人任せあなたの一番悪いとこ
小役人飲めば政治がなっとらん
女房はでっかいおむすび食うが好き

倉敷市　水粉千翁

しんみりと見つけるものに妻の皺
影のない笑顔へ苦労した匂い
年輪を語らず巨木見上げさせ
腕組んで男の自信ととのえる

大阪市　福井野迷路

耳遠うし三千世界の波静か
云い度いこと皆云わずあとほほえむ
右左揺れても国旗天をさす
之でもか之でもかとて蜜柑来る

大阪市　宮尾あいき

木枯よ吾子の墓標よけて吹け
気にかかる水かけ不動の耳の苔
無理云うて水ぶっかけて不動様
女連れたまの南でうどん食う

鹿児島市　土岐トク子

お年玉格差をつけた父性愛
抱き寄せる出稼ぎの夫の掌の強し
我れもまた人の子恋にあたたまる
頬よせて親バト子バト寝正月

島根県　福間清夢

見えすいたお世辞と知った酌をする
キャタピラが縄文土器の里を攻め
中年の恋を吐き合う連れと飲み

大阪市　市場没食子

早よ利喰しすぎたなあと株式欄
ミニの膝ぼんに塗りぐすりも塗って
また一つ市電路線が消える秋

笠岡市　木山要次

縮こまる蛙に痛い霜柱
要領のわるい奴だと悪の知恵
塗るとこを見て見ぬふりもエチケット

大阪市　西森花村

あざやかに消えたままなり流れ星
どの辺で落としてきたと子を叱り
方角を見てまで買うたに宝くじ

室戸市　奴田原紅雨

想像をしているうちに腹が立ち
酒のある反省会の賑やかさ
小便臭いとは年増のいう悋気

米子市　小西雄々

子にすべて望みたくして定年期
ハミングの妻へ洗濯物がよく乾き
振り向かぬ後姿へまた妬ける

下関市　国弘半休

言い当てたように偶然男の児
毛糸編む娘も降り通勤空になり
反応を試すしぐさの高笑い

笠岡市　出原真奇

酒の父花田が勝った日の気嫌
妻の客少うしのろけてから帰り
赤紙をペタペタはって帰りゃはり

松江市　舟木与根一

建築の粋をあつめて落ち着かず
気をまわす齢でただの胃けいれん
抜擢の廻転椅子はよくまわり

泉佐野市　大工睦夫

親の役果して肢体もゆるみ出し
顔中の皺動かして餅を喰い
還暦じゃそうなと子等は騒ぎ出し

岡山市　川端柳子

初春を舞うた小鳥に聞いてみる
呑気さはいともめでたく子沢山
天使舞い下りて胎動しらしめる

兵庫県　遠山可住

もう一パい飲んで師走の風へ向き

御用始め訓辞を聞いて飲みに散る
初詣りこの人波の平和過ぎ

高槻市　福田丁路

持ち前のセンスを殺すアイシャドウ
危機一髪突差の嘘で身を守り
ガンらしく思えてならず泣く夜かな

桜井市　岩本雀踊子

家の良い親爺になってあぐらかく
まんまるうなって女が泣いている
妥協の出来ぬ弱さを自笑する

大阪市　横倉富久一

揺りカゴに明日をつくるのびちぢみ
団欒に不善を知らぬ父が居て
まつすぐな木が逆流にさいなまれ

和歌山市　垂井葵水

枯れるものあるから枯野広くなる
用のない犬までついて来る師走
帰えり道ひょっこり君と出会いそう

大阪府　高津徹也

舞い戻る蝶へ春の芽の確か
三月の雪おおらかに見上げけり
春の苗などハンケチへもらって来

広島県　高橋鬼焼

北風の詩に風鈴が冷えてくる
ニコヨンのくらしに耐えるちびた靴
通話料気にする母へ長話

倉敷市　木村千容

新春雑感

八十三ヨイショとシコを踏んでみる
限界を意識した夜の星きれい
わが影のかぼそく淡く老いてゆく

高石市　谷沢好祐

口笛で夜勤の明けた朝の風呂
出勤へ降りれば走る朝の足

パリ会談

無しにしてお手々つないで輪になりな

倉敷市　野田素身郎

元日だせめてマスクを取り給え
雪景色だけは見事な左遷の地
一合の酒で吹雪に立ち向い

東大阪市　森下愛論

髭伸し恋なんか忘れる忙しさ
元旦は来る客もなく妻も酔い
本年もよろしく福寿草が咲き

宝塚市　小畠無聖

ふかぶかと蒔絵のような闇に寝る

声もなく影もわたしについて泣き
人肌の恋しさ小唄口ずさむ
岡山市　江国幽谷

正直に届けて駐在所も困り
正月やないかと割烹着を脱がし
週刊誌の知恵で口角泡が飛び
大阪市　今西章雅

らんちゅうの血圧気になるガラス越し
廻せるもの廻し歳暮の義理はたし
エリートに甘えいちょうを踏みにじり（東大スト）
岡山県　大森娯句楽

あわただし師走夜業で晴着縫う
保険屋の縁喜でもないことほのめかせ
母親の言い触れる程子は出来ず
奈良市　宮口笛生

ぷちぷちと数の子お金をかじる音
母の留守素直な子供達であり
夏柑の色へ紀州の冬が晴れ
鳥取県　森本法泉子

大晦日いよいよ賀状にとりかかり
　妻の快癒をねがって（二句）
一二三…百まで数える日を待たん
人生は遠し寄り道するもよし
兵庫県　河原みのる

追伸へ候文を使こたろか
口だけが達者な中風もあわれ
とうとうまいらはったと長持ちし
宇部市　平田実男

是非一票欲しい賀状が妻へも来
伝書鳩のような男で貯めていず
兄嫁が寝込み元気になった母
岡山県　横山一声

米作るよりも宅地で売りたがり
おばはんの方が僕の横に掛け
言いかけた小言をやめるお元日
熊本市　楠田英子

前途洋々成人の息子の頬のはり
夕食のにおいの中に靴をぬぎ
　兄ギブスの中で
むりすなとむりした病人にいたわられ
堺市　高橋千万子

新調の着物に鏡ふいて見る
日々出合う人とは見えぬ訪問着
棚卸し倉庫の中に火がともる
松江市　岡崎祥月

とそだけはいただいておく下戸の口

現実に遠い空想練るも夢
四十年のキャリアを生かすペンをとり

大阪市　西川誓二

悠久の古都も新年の息吹ぶき
決意をば新たに二浪の武者振い
持ち直し看護疲れの肩叩く

京都府　清水谷句楽坊

孫たちに年玉もらい老をしり
革命僧電気毛布で座禅くみ
気のきいた鬼は節分外遊す

鳥取県　森田布堂

暖房を効かせ若さはビール飲み
殉国碑誰があげたか菊の白
筆の穂をうっかり甜めてそれを買い

伊丹市　小川静観堂

老妻病死
五十年おなじ枕へまくら経
マイカーの時代に手ッ甲脚絆がけ
息子ハワイへ新婚旅行
里帰えりみたいなムームー撮されて

大阪市　川口弘生

冷暖房完備で医者と手が切れず
月の裏見た人が居るお正月
四十代その後半が馳けて行く

大阪市　室谷鉄舟

「すいません」その一言で痛み耐え
古い型走らせローカル線赤字
貸し金が焦げついたまま除夜の鐘

高槻市　山田季賛

でっかい事言うては見たがまとまらず
控え目で結局話丸めてる
暮し向き貧乏が板についてくる

守口市　羽原静歩

（黒田紅樹氏を悼む）
逆さ富士旅路の果てを追うて来る
日日好日枯山水のポーズする
御想像にまかせますとは陰の声

姫路市　隠岐不酔

陳笠は会費の外のあと始末
一聞いて代書屋うまく尾ひれつけ
凧の糸切れて天地に逆らわず

久留米市　永松道雄

初雪を庭木の枝が軽く受け
電気毛布故障だった妻の風邪
早朝の往診すまぬ雪が降り

兵庫県　大江秋月

財布握ってからの若嫁強くなり

春が来た来たと団地を風が抜け
お年玉手刀切って子が貰い
西宮市　島居百酒

ダウ高値漸く元をとっただけ
花代も割増しである初春を酌ぎ
台北にまだ日本が匂うとり
倉敷市　井上旭峯

人妻の盛装別な顔で来る
高いびき寝顔の魅力明日があり
マスコミが捨ててはおかぬ風変り
笠岡市　松本忠三

過去帳に虫が食ってる百回忌
介抱をしてと仲居の物騒な
ジーパンの上にハッピの出初式
富田林市　岩田みよ

笛吹けどタクトも振れどふり向かず
和む心横切上る雨に身を任せ
吹流しのように馬の尾浮きがり
ハワイ　上田紅溪

青空が徐々に広がる雲がにげ
明月の素顔をあばく宇宙船
月写真かぐやの墓は見つからず
鳥取県　清水一保

ライバルもがん張っている互礼会
人間が変ったのでなし世が変り
松江市　柳楽鶴丸

カラーテレビのアンテナさして家教え
初詣で一番乗をしたけれど
岸和田市　葛木伊三郎

柏手に六根清浄込めて打ち
一声が聞きたい鶴の網に立つ
善通寺市　岩田ひさお

加害者のこころ外科医は関知せず
雨の日を選んで隣死に給い
加賀市　細呂木魯木

座右銘の色紙に恥じる吾が暮し
服薬へあお向けば天井のすすが見え
和歌山市　土谷城石

角曲げて海老も目出度い膳に乗る
野天風呂女一人に目をつける
和泉市　西岡洛酔

初詣でぎょうさんぎょうさん頼んで来
シームレスなんときれいに見せる事
富田林市　浅川八郎

何か知ら蒸発なまめかしさだけ残り
齢七十賀状書く手のふるえて来

倉敷市　小幡里風

ふる里へ来て考えがまとまらず
けつまずく小石へ秘めた小さい嘘

小松市　馬場魚山

国道の車の列も十二月
太陽を七色にしてつららやせ

八尾市　古川鶴声

道問えばジロジロ顔を見詰められ
小波へ逆らう目高列をなし

★

川村好郎

諾否決めかね煙草喫う速度
新年の駅にする気か水を撒く
お決まりのおだてが耳をぬけてゆく
会うたびに妻母となる素晴らしさ
鰻食う働く夫婦にふとみとれ

西尾栞

コツコツコツ出勤の猫背が硝子にうつる
あの人も同じ思いの思慕の詩
佗助に立てばいつしか隠者めき
二号と後妻貯める話に馬があい
健康法訊けば盃もつ仕草

北川春巣

恩師から賀状の返事老いたまう
管理職などとある日はおだてられ
学割をフルに活用するプラン
　岳父七七忌墓参（十二月二十二日）
七七忌近江の土は冷たかろ
ご詠歌に昔の地理を思い出し

若本多久志

流転どころか大地崩れる母の座よ
信じようと苦しむ胸に親の業
人の子の親とは悲し業深き
子は子への人生がありさりながら
モンタージュ可愛い顔の三億円

菊沢小松園

魚ごころあれど対手は気がつかず
ぶら下るにも蓑虫の長が短か
愛つなぐ心があわれ嘘になり
研ぎ澄ました言葉対手の出方待ち
老らくの恋足許をかばい合い

清水白柳

濡れた砂にぎり遠出を悔ゆる日よ
夢のない男は鼻毛など抜かず
逃げ出しはしない羽根が生えるのを待つ
　雅号のことなど
五十年雪に因んだ名に生きる

川傍柳初篇研究

（六十九）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須唖三味
清　博美丸　十府
藤井和雄　岡田　甫

541　稗畑弐三だん買ふ子ぼんのふ　　門柳

岡崎＝生まれた赤ん坊のために、いまから稗田を二三段買っておくなどは子煩悩よりも、むしろ親馬鹿の部類だろう。

清＝気の遠くなるような話だが、それが親心であろう。

藤井＝女の子には桐の苗木を植え男の子には美田ならぬ稗田を二三段の親心。今なら学資資金信託加入という所だ。

高須＝原本は「稗田」ヒエは田に作らず畑に作る。イネと同じ一年生草木だが、イネより耕作が楽で、イネより下等の食物とされ、家畜の飼料ともなった。それで稗畑を子のために買ったのであろうが、当時といえども二三段といえば、なかなか広大なものと思うが……。

丸＝「稗畑二三段」は稗蒔二三枚の洒落である。稗蒔一枚くらいなら普通だが、二三枚も買うとは、よくよくの子煩悩である。

岡田＝「守貞漫稿」に「ひえまきは初夏の頃これを売る。これ瓦盆にヒエ種をまき、芽を出して四五分なる物に田家人畜の製物をおく」と書いているように一種の小さい箱庭のことです。子供のころ植木屋や夜店でよく見たが、まだ少しは売っている由。名前はヒエマキという。ヒエマキは箱庭でも田園風景の感じを出して、百姓とか案山子、鷺のような土製の小さな焼物を添えてある。

作大将ぐるみ三文で買い　　一九・16

作大将は百姓のことですが、百姓の姿も人形で添えてある。大たい三文か四文ぐらいだったようです。句の「ひえ畑二三段買ふ子ぼんのう」も、この箱庭を子供に二つ三つ買ってやったという意味です。ほんとうのヒエ畑ではありません。

542　こんばくが屋根に居るのにもふくどき　　一甫

岡崎＝人が死ぬと四十九日の間は、その魂魄が家の棟に止まるという。亭主が死んで四十九日の牡丹餅も供えないうちに、早くも残された後家を口説いている。

高須＝亭主のコンパクが、まだ家の棟にいるというのに、その未亡人を口説くとは、前々から気のあった人か？待ってましたとばかり言い寄ったのであろう。「死ぬものが損とは後家へあてこすり」　　八・39

前田＝礎稿に賛。「牡丹餅をつくと魂魄どっか行き」（筥四・29）

丸・岡田＝賛。

543　知ッたぶり下女おひらきをやたらいい　　眠狐

岡崎＝婚礼宴のめでたい席では、去る、お

しまいなど忌み詞として嫌われ、「おひらき」といって、新夫婦の床入りとなった。この「おひらき」ということばを聞きかじった下女が、なんでもかでも「おひらき」を乱発している。

藤井＝賛。「おひらき」は自由解放の意味がある。封建時代の下女にはうれしい言葉にちがいなかった。

高須＝「お開き」とは「床入り」と聞いてそれ以来やたらに「おひらき」したがる下女、この下女相模出身と見たはヒガ目か…

「相模下女寝たがるだけが落度なり」

丸＝礎稿に賛「おひらき」に特別の意味を強調する必要はない。

岡田＝同。

544 庚申におし事をするあら世帯

船　汀

岡崎＝庚申は既出。しかし、そんな戒律も新婚早々の若夫婦は頓着しない。そして、「こらへじやうなく盗人をはらむなり」（一二2）ということになる。「おし事」は索引では「お仕事」とあてているが、押し事（無理なこと）がよくはなかろうか。（「知ってゐながらこのをばが、押し事したるその咎め」近松・女胆功）

庚申をうるさく思ふ新世帯　　傍四・17

もうよからうと庚申の明け方　　傍三・17

藤井＝庚申の夜は何もしないで仏家では帝釈天及青面金剛を神道では猿田彦を祭って徹夜する。道家でいう人身に入る三尸（さんし）が人の睡に乗じて体からぬけ出し、その罪を上帝に告げるのを眠らないで守るためと云われ、またその夜眠ると三尸が人の命を短かくするとも云われる。川柳では主に夫婦同衾を禁じているが、とにかく何も仕事しないで神を守るのが本義だから、単に仕事でよいのではなかろうか。もちろんこの句では、新世帯だから夫婦の仕事のことを指してはいるが。

高須＝庚申は既出。

かのえさる女房を口説きおとす也

庚申に宵から寝るは世捨人　　二一・26

庚申を嫁の聞くのは目立つ也　　一三・35

丸＝賛。「おし事」は、やはりお仕事でよいのではないか。

岡田＝川柳の当時には「押し事」というコトバはありません。礎稿に引用の例は上方語で、また時代もずっと先きであります。

545 灸よりハ男が娘おそなわり

門　柳

岡崎＝娘の欲求不満性の労咳には四火の灸より、ムコでもあてがうのが療法・箱入り娘にして男と交際させなかったので、労咳になったのだから——。

清＝賛。

労咳のもとは行儀をよく育ち

こッち例ならぬは男ほしい也　　五・42　一八・22

藤井＝「おそなわり」は、おそくなった。男を灸より先にすればよかったのに。

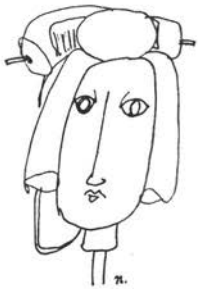
高須＝労咳には黒猫を飼うとよいとされそれで「灸の紙丸めてじやらす鳥猫」（八36）という句もあるが、それよりもボーイフレンドを一人あてがう方が早手まわしか

丸＝諸説に賛。

岡田＝同。なお遅くなることを「遅なわる」というコトバは、室町時代の、「曽我物語」や能狂言などの会話にも見え、その当時からの口語です。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二一—四
夜間 (762) 四四〇八

女性上位時代の女流作家が、選者のほとんどが男性なので、何か抵抗を感じていないか。たとえば女ならではの句に対して、男性の選者が、よくその女ごころをつかんでいるかどうか——などを皆さんにご執筆ねがった。（編集部）



女流作家から男性選者へ

・同人特集・

一にも二にも勉強

山川阿茶

女らしいキメの細かい句の作れぬ私のような者は選者が男性であろうと女性であろうと同じようなものですけれど、何％かの抵抗がないではありません。世は明治百年、その七〇％を生きて来た私であり、交際も相当広かったし、職業柄いろいろの階級の男性にも接して来ていますから、男性の心理、生態、男の日常も百％とは申せませんが或る水準まではわかっているように思います。ですから男性のベテラン選者級の方にも同じ事が云えるのではないでしょうか。しかし女の選者に抜ける句が、男の選者に抜けないと云う事もあるのは事実です。

例をあげてみると（自分の句で恐れ入ります）文楽の句を、七つか八つか見て貰った結果、前書きのある句ばかりですが、

A　選者

①こなさんと千代が紅散る身八つ口　（宵庚申）
②振袖のかなしくからむ鎧櫃　（太　十）
③むざむざとこんな殿御を死ににやり　（太　十）

B　選者

筋金も根性もなく義理の前　（宵庚申）

C　選者

むざむざとこんな殿御を死ににやり
振袖のかなしくからむ鎧櫃
太十へ居眠ってはる若い人　（太　十）

A選者は女性であり①の句を大変にほめて下さったが、B、Cの男性の選者には没であった。

Cの選者は男性ではあるが、女性選者の抜いておられる句を二句まで抜いておられる。これを見ても男性と女性、男性と男性でも

多少のちがいは出て来る。勿論教養、センス思想、環境も、各々ちがうのだし、好き嫌いと云う条件も入って来るのだから、各人同様と云う事は無理である。しかし選者は又選者が向上してきて前に抜いた句に反省する事もあろうし、前に抜かなかった句に反省する事もあるであろうと思いました。歌舞伎にしろ文楽にしろ、和服の事、又は昔からある「しきたり」にしろ、古いと云えば古いと云っても現在の日本に実在するものについては、一応知っていなければならないのではないでしょうか。「勉強をせんといかん」と云う結論が出そうです。

近頃は小さい時からガールフレンドがあり男が台所にも進出するし、男性の女性用美容師、服飾デザイナーもたくさんあり、W過剰の男性も多くなりつつある時代ですから「男性の選者」を特別意識する必要がなくなるのではないでしょうか。

M過剰W過剰でややこしい

仄かながら女の匂いまだ残り

本論からははずれるのですか、余白があるので、私の希望をのべさせて貰います。

①一つの題を三人なり四人の選者に見て貰うシステムを句会として出来なければ、ゼミナーとしてでも、時々やって新風を吹き入れて欲しい。没になっても皆にぬけなかったのだからと納得もゆくし、不平や蔭の声も少くなるではないだろうか。

②これは二賞にも云える事で、毎月選者の皆さんが、「秀句鑑賞」のような形で一句でも二句でも眼についた句をもちよって発表して欲しいと思う。「秀句鑑賞」にのらない句が、二賞の候補句にのっている事もあるのだから。大統領選挙じゃありませんが、このようにして、票を読むのも方法だと思います。

選者には大いに裏付のある自信をもっていただき、と云っても自信過剰では困ると思いますが、そこはやはり日頃から勉強をしていただくことになりましょうか。暴言多謝。

思うこと

久米奈良子

率直にいって何の抵抗も感じないといえばウソになるので、この機会に頭に浮かんだことを書きました。

さて勇気を出して駄句を並べてみます。

シミ消えて自惚れ鏡のほほえみ

美容院美人鏡と知るウカツ

仮縫いの鏡へ立ちて旅のこと

香水をかえて想いを断つあした

これを書くにあたって第三句を妹に聞かせたところ、「新婚旅行の服の仮縫いやな」と申します。句主が私だとわかって二人で思わず吹き出してしまいました。とたんにバラ色のムードはこわれてしまいましたが、一瞬なりと想像力をたくましうさせた意外さに驚いた次第です。第一句の自惚れ鏡、次の美人鏡など女性ならしばしば経験することかと思います。自分の欠点を魔術のようにふっとかくし、美化してくれる、美容院の鏡でもありまず。年が明けて次の坂を越えようとする女の祈りにも似たものが秘められているのです。

また仮縫室における鏡の中には、果てしない夢やあこがれが映じています。随分、説明的になって恐縮ですが、このような事は、句の巧拙以前に女性選者にならわかってもらえると思うのはひとりよがりの私の甘えなのでしょうか。ある時女性でなくては理解しにくい、又感じえない事柄、表現できないものがあるとするなら選もまた然りかと思うのです選に抜けるということは、嬉しいには違いないけれど、女性選者によって心からの共感を呼び、陽の目を見る句であるとすれば私にとって尚喜ばしい限りです。

大先輩内藤きさ子さんは

たわし二個すり減り一年めぐり来る

生活即川柳ともいうべき素直な句を女性ならではの感覚で詠いあげておられます。中島生々庵先生によって堂々入選されていることを思えば、チョッピリ私の主張も鈍るのですけれど。

そもそも女流作家は、女性選者はいつごろからか？その歴史について考えさせられた事でした。そして二月号の岡田甫先生の異本「柳多留」にお答えの玉稿は、最近にない感銘を受けました。それは常に私の感じて実行していない事だったからです。書の法帖や古筆ともいうべき古川柳をよく知らず、その歴史等を調べる勉強や努力をしないで過ごしてきたことに云いわけのできないはずかしさを覚えます。明治になって井上剣花坊氏夫人信子女史や、その後「麻生路郎先生が女流作家養成のために設けられた川柳雑誌「金泥集」における選を受け持たれた葭乃先生の輝かしい功績とともに、私達が川柳の母として仰ぐ身近かなお姿があります。雑詠の選者としては僅かに井上信子女史と、広島川柳会主宰の森由香里女史があったと聞いております。

そして路郎先生は、昭和三十年福寿草の序文に、「明治末葉の女性川柳家で今日まで続いているのは僕の記憶では葭乃ぐらいのものである。葭乃にしても僕と結婚していなかったら遠うの昔にやめていたのに違いない」と書き出しておられます。いまは川柳人口の何分の一が女性なのかしらないけれど、婦人友の会はなやかなりし頃を思えば、近作の女流作家群は別として何かしら一抹のさびしさがあります。いつだったか、「川柳を作っている人にオールドミス（今のハイミスか？）が多いから、うちの娘には川柳をさせない」と敬遠された話の真偽は別としてなるほどと頷けなくもないのです。

短詩文学の一つに数えられながら、俳句や短歌に比べて一段と低くみられ勝ちな川柳のために、私達は何をなすべきなのでしょう。

視野が狭いとされる女性は雑詠選者としての道は、とうてい開けないものでしょうか。

その原因が、博学でないこと、適確な洞察力、選句眼、人生経験等の不足、いわゆる柳歴の永続性のなさ等、すべて男性に劣るとするなら、もっとほかにも、理由があるにしても、一歩なりと近づくための反省と努力を思うのです。

真の意味の女流作家としての自覚とともに絶間なく時代の息吹きを吸集しながら、ひたむきな作句姿勢を保ちたいものです。

いつの日か、短詩の世界に誇れる葭乃先生につづくユニークな女性の雑詠選者が川柳塔から最初に生まれ出るとしたら、これこそ素晴らしい前進だと思います。

そしてその場合どんなエレガンスな選が見られることでしょうか。またこんな事も考えるのです。女性自身が望んだ選者も案外、同性への採点はきびしく、又新たな注文も出されるのではないかと、何はさておき、この特集が跳躍台となって自らの手でその門戸の開かれるよう念じています。

知らぬ者の強みで、かやく御飯めいた駄文を連らねてしまいました。お笑い草かと思いますが、欲ばりの私にどうぞ、お叱りもお導きもお力添えもいただきますように。

思いつくまま

三井酔夢

同じバラ作りをしていても、真紅に燃える大輪に魅せられる人、清楚な白バラを好む人と多種多様である。

赤い花がいい、否、白色がまさると、激しい論争があったとしても、皆バラを愛すればこそだと思う。

人それぞれで、川柳家にしても、主義主張は全たく自由である。しかし、川柳という土壌がなければ、赤や白の花は咲かない。その上、日光にも心配らねばならないし、肥料も必要である。特に、剪定が難しく、パチリ、パチリとでたらめに枝を切りとっては、より美しい花を咲かせることが出来なくなる。

この剪定の立場が、選者の位置に似ていないだろうか。選者とは、長い歳月をかけて、自ら学び開拓した川柳眼で、自信をもって選を行っている筈だから、これは一つの権威だと思う。豊かな社会性、批判力の深さ、鋭い感覚……等々が蓄積されて、句を見る目が確かなことだと思う。

しかし、これは性別を云々する以前のものであって、男性でも女性でも一向にかまわないのではあるまいか。

むしろ抵抗を感じるとすれば、権威に対して、尊敬、私淑出来ない選を感じる時ではないのだろうか。

×

四国の片田舎に住み、数多い柳誌の全貌を知るよしもないが、手元にある少数の雑誌を見ると、各柳誌に女性の進出がめざましい。女性上位論が、かしましい世の中だから、柳界にも当然の現象なのかも知れない。

女は、女らしい句をと、大先輩のお言葉だが、この女らしい句の受けとめ方に、選者も作者も大きな問題があると思う。

女性特有の情緒は、時に高ぶり過ぎて、感情に走り易く、視野の狭い内容をあっと思わせるような表現で、人の目をひきたがる。生来、女は装飾好きで、自己陶酔に陥り易い。その上、さめざめと泣いて、けろりと笑うことさえ出来る。所詮、メークアップは落ちるのだから、この誇張、粉飾された女の正体を喝破されるのも、選者の御慧眼によらなければならない。社会や人生に対する甘さも、女だからと許されるものではない。作句に際しても、女だからと云うことで、選者の寛容さに甘えてはならないと思っている。

勿論、これらすべて、自戒のつもりで書いたので、いつの日か、行き過ぎてほのかな余情を残せるような、女らしい句を作りたいと願っているのである。

ここに一すじのけわしい道がある。

川柳に魅せられ、もう十年も歩いて来たと思うのに、遅々として前進していない。

走りながら考える人は、どんどん先へ行ってしまった。私などは、考えては止まり、止まってはみち草をして、大切な時を失っていると思う。

川柳塔の片隅で、ひよろひよろと枝をはびこらせている小さな苗木の私に、きれ味のいいハサミで、どのような剪定になるのだろうか。

ありがたいことに、私はよき師を戴いている。

破調や難解の句には

内藤きさ子

一週間ほど家をあけなければならない用事が出来、とうとう原稿の〆切日に間に合わなくなってしまいました。いつもご迷惑ばかりおかけして申訳ございません。

男性の選者といえども、女性の心理をよくつかんで、女性以上の感覚をもっておられる方もありますので私としてはこれまでに抵抗を感じたことがございません。むしろ私のように、むつかしいことの嫌いな者は、とても男性の方々のような選者にはなれないと思っております。

ただ私個人といたしましては、その選句の中に、八〇パーセントまで難解な句がありましたときだけ、やや抵抗を感じるだけです。

破調の句や、難解の句には、どうしても古風な私にとりましては、ついてゆけない世界のように思われ、川柳はやはり誰にもわかる句で定型であってほしいと思っております。

男性選者へ

西出一栄

雑詠や句会では、ほとんど選者は男性ばかり、その男性選者に対して抵抗を感じないかと云うご質問に、はじめて「ああ、そうだったな」と鈍感な私です。と云いますのも抵抗を感じたことがないと云う証拠と申せましょう。雑詠になりますと作者の気持ち、何を詠まんとしているかを理解せねばなりませんし作者の志すところを、よく見つめなければならないと思います。さすれば雑詠の選者はとてもむつかしいものと思います。

その点で男性の方々は社会に活躍し、いろんな面でいろんなことを見たり聞いたりして視野が広く、世事にも長けておいでですのでどの方面の句でも、理解でき、判断なさる事と信じています。ゆえに私は抵抗など一度も感じたことはございません。むしろご苦労なことと感謝さえ致して居ります。

しかし、選者はコンピューターではなく、血も涙も人一倍多い川柳家のこととて、選者の性に合った句、お好きな句がよく抜けるように存じます。そこで選者に合わせて作句なさる作者もおいでになることと思います。そう云う技巧を持ち合わせ融通出来る作者をうらやましく思います。

私のように思慮も浅く融通性のないものは困ったものです。自分のカラーの句をマイペースで行くより仕方がありません。近頃若手

作家が感覚に訴えるような句をお作りになりますが、どうしても私には真似の出来そうもありません。明治が抜け切れない歯がゆい限りです。いや頭の回転が悪いのです。セクトを云わず視野を広く、柳界に精進したい気持ちは人一倍なのですが……。

比較的上位にある句には、女性作家のが多いとか、野次馬に聞きました。それは男性選者が女性に甘いのではなく、女性が男性同様川柳に勝れているから……と云うことにしておきましょう。

近頃の私はヘレンケラー女史のような身体の状態（ただしおつむの中味は別）ですので物見遊山にも行けず、孫に、「ピンボケばあさん」と云われないように、句の抜ける抜けんは第二の問題として、川柳を唯一つの趣味にして明け暮れております。とは云うものの立派な選者によって抜かれた句は嬉しく、それらの句をのれんなどにして、知り合いの人々によろこびを分けているような次第でございます。いずれ近い将来、女性選者が生まれたとしたら、女性でなければ解らない女心の機微をとらえた、よい句を選んで戴けることを期待しています。

感謝あるのみ

天正千梢

女流作家の立ち場から、男性である選者へ対して何かきいてもらいたい事はないかというお便りいただきましたので、一瞬とまどいを感じました。再び読みなおしましたが、私は男性選者の諸先生方には敬意を表していこそすれ、何の抵抗も感じておりません。雑誌が到着しましたら、先ず好きな作家の句に吸い寄せられる、むさぼるようにページをくっていきます。直原先生の表紙も、その月月にふさわしい、ご立派な筆のはこびに、何か一句出来ないかなと思いながら、ただうっとりとページを繰っては、第一ページから一字のがさず読み進み、毎月のように、皆さんの名句に酔わされ、そのたび劣等感がつきまといます。

雑詠などでも、あの方の没になった句はどんな句だったのかしら、この方の没にはどんな句が出されていたのだろうかと、いらぬおせっかいまでして、私は結構たのしんでいます。原稿ご依頼の主旨に、はずれた文章になり、申し訳ございませんが、特別に選者の諸先生方が男性であることにになにも抵抗を感じず、ただただご苦労を感謝している次第でございます。

旅行・宴会・リクリューションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本　社　東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6951

守口出張所　守口市京阪本通2-18
三洋電機㈱本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

孤独

高鷲亜鈍

ユダもパウロもイエスも孤独
キリストの偉さは孤独にも泣かず
無いものには無い有るものには有る神
無神論を信ずる教えが仏教か
病犬捨てる相談いまさら乗れぬほく
往診は戸口の犬にしてかえり
晴れた日に犬の仕末をしてもらい
賢こい犬だった短命におわり
黒星がつづいても土俵をつとめる気
眼が覚めてあたりの見える夢をみた
教会へ疳癪玉の手を曳いて
上をみても下をみても暗いくらい穴
習性は一人歩きと書くことと
救いなく煙草の量が多くなり
凡骨へ我執いやらしく喰いつき
欲しがられ指頭の美学こそうれし

・近詠・

大阪市　橋本緑雨

月給の事を忘れぬ七十七
　湯原温泉
肌と月が出ている露天風呂
山を見よ茹田も見よと新幹線

須坂市　高峰柳児

笑顔とは別にたくらみときすまし
出稼ぎへだんだんしぼむ村祭り
村の駅大安の日を彩られ
遠のいた悲しみ叙勲にゆすぶられ

大洲市　米沢暁明

学校の鶏は餌だけ食えばよし
二三人しゃべり全体会終る
覆面をとり大詰めとなる台詞
ぞろぞろと先頭だけが知った道

今治市　月原宵明

黒人の唄ふんまんをぶちまける
故郷を過ぎる夜汽車の窓を拭き
整形を成人式に間に合わせ
ホステスの素顔郵便局を出る
吊るすものみんな吊して山家冬

今治市　長野文庫

冷戦のような姿の老夫婦
宿屋の床にあるから偽と見られたり
いじめる気ではない税にいじめられ
誘致した時公害もついて来た

名古屋市　長谷川鮮山

なれそめの皮肉にも似ている言葉
有りついた赤だし朝をかみしめる
今朝もまた歩道橋まで孫の守

川柳日記

麻生葭乃

秋から一月へ

働蜂が帰るラッシュだ遠慮しよう
床の間の軸は河童のままで秋
堂守の娘へ銀杏散る秋となり
時雨ぞら灸をすえ合う母と娘と
手術後の枕へ通う除夜の鐘
退院をして松すぎた賀状書く
寝て起きて食べて又寝て猫なみに
人生のトンネル先が見えて来た

★

生駒から

——一三夫・葉子宛に——

手術後の枕へ通う除夜の鐘
退院をして松すぎた賀状書く
寝て起きて食べて又寝て猫なみに

桜咲く頃までは冬眠を続けるつもりでございます。（一月十六日**麻生葭乃**）

川上三太郎先生追悼川柳大会

▼**日時**・昭和44年3月21日（祭日）10時から
▼**会場**・新津市駅前ホテル美好（駅から徒歩0分です）
▼**会費**・300円（記念品贈呈）

川上三太郎を語る

白石朝太郎
石原青竜刀
佐藤　正敏

▼**宿題**（各題2句のこと）地蔵尊・ひよこ・巨匠・偏平・こぶ・やわらかい・白髪・馬
▼**席題**・3題当日発表・正午締切
▼**投句**・出席者は当日持参のこと・欠席者は3月15日まで100円同封（柳都5月号希望者のみ）のこと
新津局私書箱15号柳都川柳社宛

▼川岡霊眼子氏（諫早市同人）は山本五十六と鶴島正子伝の執筆取材に多忙のかたわら、例の熊沢天皇従妹の子息の嫁さがしに駈けずりまわり作句も思うにまかせぬ状態とか。
▼藤井明朗氏（島根県同人）の母堂が二月十日八十六歳のご高令で逝去された。謹悼。
▼高津徹也氏（尼崎市同人）の新住所は、尼崎市大庄中通り二丁目五七。
▼四十三年度東洋樹川柳賞（賞金五万円）は、ますかっと主宰、大森風来子氏に決定。
▼後藤梅志氏（大阪市参事）はカゼが原因で、最近右手の自由が利かず、毎月の秀句鑑賞の執筆を必死のおもいでペンをにぎっておられる。氏の熱心さにはいつも頭が下がる。
▼関戸宗太郎氏（石川県同人）は金沢大学付属病院で再三手術をされながらも川柳への情熱は失わず闘病中とのこと。ご全快を祈る。
▼小樽川柳社の住居表示は小樽市花園三丁目二〇番八号になった。

秀句鑑賞

…前月号から…

後藤梅志

吹き溜り落葉となりしめぐりあい　（奈良子）

この句は元来、短歌的素材の句で、卅一字ならば納得のいくところだが、十七文字なるため叙述が足りず、いささか情緒に乏しく感じられるが〝吹き溜り〟のあとへ「めぐりあい」が来て川柳的になった感がある。

木の葉となり、樹々の梢はべつにしても、落葉となって吹き溜りの中で同じ運命をささやいてでもいるかのように肩をよせ合っている、こう感じられる。

比較的、高い境地の作句で、なんとなく好もしい。いい素質の句といえよう。

泣くという手もあり乍ら意地っぱり　（酔　夢）

作者の性格の出た、小気味よい句だ。

人の境遇は表面ではわからない。作者に辛酸をなめた過去があることは、月々の作句でも判るし、人となりもどこか男性的なとこがあり、失礼だが興味をもっていた。

涙というものは、めったに流すものではない。心で泣けとは、母のしつけにもある。

紙屋治兵衛でさえも「悲しい涙は目より出で無念の涙は耳から成共出るならば」と歎げいている。その泣くよりは、笑ってる方がつらい。もっともそれは根性のある人のこと。

割勘へ鰯と蜥蜴のバッグ開く　（み　よ）

「鰯と蜥蜴」とは、ワニ皮ととかげのハンドバッグで、上等の持物だ。

今、期せずして両方から割勘のお金を出そうとしている。割勘は、元々貧乏人のすること。気前よくどっちか一方払ってもよさそうだが、仲々そうはさせぬ。ではと、両方から出すことになったらしい。面白い状景だ。

この句、きびきびと省略がきいて、凡句ではない。しかも、油断のならぬ諷刺を秘めている。ワニとトカゲが、くせもの。

庭石のよさ風雪に耐えたあと　（一　声）

この句は、どこの庭にもある平凡な状景だが、どこか人を引きつけるものがあるのは、「風雪に耐えたあと」が利いているのであろう。石というものは、黙して語らないが、一つとして同じものはなく、よく見れば、皆何かを物語っている。

しかし火成岩は面白くなく、水成岩の、しかも土中から掘り出したものより、河床から採取したものに、風致があるのは妙である。水の作用する力も、併せて鑑賞したい。

がめつさの順に売上げ伸ばして来　（高　志）

「がめつい」というのは大阪弁だが、今は一般化した感がある。しかもこの句は「がめつさ」がよく働いている。

どのセールスも、ノルマでさかんだが、がめつい人間にはかなわないらしい。商売の武器には、いろいろあり、教養と学歴も、賢こさも、抜け目のないのも武器だが、このがめつさだけは別物らしい。しかもこのがめつさにも等級があり、ピンからキリまであることを、この句は証明した。川柳らしい句。

ペンダコの手で日曜の釘を打つ　（春　巳）

「日曜大工」を日曜大工と云わず「ペンダコの手」としたところに、作者のもち味があるように思う。

作句というものは、頭にあることを不用意にさらけ出してしまっては、味もそっけもない。句になる用語をひねり出すべきである。ラン作を戒しめているのも、一般に陥入り易いものへの選者の警告であるように思う。

もっとも、素質というものがあり、授りも

のだけに、其辺はなんとも云えない。

元日の汽車は混んでもすがすがし

（秋　月）

元日というものはうれしいものだ。まず、お早ようという前に、おめでとうとくる。一様に、このアイサツをする。都会と田舎とを問わず、一陽来復を寿ほぐ。これは日本の美風であろう。汽車の中は格別と思われる。混んでも苦にならぬ。すがすがしいからだ。

ところが、都会の電車やバスはそうはゆかぬ。じろじろ服装を見たり、履物を気にしたりする。どうも地方人の方が淳朴だ。

この句は平凡なるに真理を含んでいる。

迷い子をやっと寝かせて手配済み

（美　房）

手配済みとは、警察用語であろう。作者は巡査さんかと思われる。ほほえましい。

巡査さんの仕事は慎瑣なものであって、酔っぱらいの世話や、ケンカ出入りの跡始末。数えればキリがない。その上上司への報告書がある。なん共気の毒な次第だが、この句の如く、迷い子の始末も報告書ものだ。

しかし乍ら、迷い子が泣きやんで、恐いお巡りさんににこっとわらい掛けて来るのも楽しみの一つであろう。着実な作句である。

確めて見ねば手さぐり気が済まず

（正　朗）

盲人の視野は、目明きの人が想像するよりずっとひろい。それは心の目で見るからだろう。これを盲人のカンと云う。

この句の如く、そこにあるものが、何であるか、どうしてそこにあるのか、形は、手ざわりは、を確かめ腹に入れる。風の音、におい、人の来る足音、みなカンにつながる。その努力はたいしたものだ。そしてその記憶は消えることがない。片眼の人より両眼盲いてる方が心境は確かなものと想像される。

心迷えるものに川のすなおなり

（葉　子）

人間の弱さは、如何ほど強がりでも、自然の悠久な姿にはぬかずく外はない。

心迷えるものには、助けともなろう。心の糧ともなろう。この句は「すなおなり」と云っているが、それは詩眼を通じてのこと。悠久な川の姿には、少しの渋滞もない。

川柳は、自然を引きつけて詠むもの。俳句は、自然の中へとけ込んでゆくもの。と大体に一致しているが、それは作者の、自然に対する態度一つに懸っている。

わがものとして足音を聞く夜なり

（政　己）

この句は作句の出来上りが、何かあり気にふつくらとした、余情を示しているが、単に自分は足音を、夜道にきいていると、解すべきであろう。然し余情をたたえていることは確かだ。

一人であるく足音というものは、さびしくもおり、愉しくもおり、若い人達には感傷的にもなり易い。曲りくねった屋敷町を夜半に歩くときなぞは、ふと思い掛けぬ木犀の香りなどを嗅ぐときもある。そうした余情だ。

ミミッチイ夢よ師走のクジを買う

（弘　美）

ミミッチイ夢と、云うたところに、作者の何かしら気概らしいものを感じる。

宝くじのようなものも、いまは庶民共通の夢となっているから、必ずしもミミッチィとは云えない。しかし作者はそう思う。それでよいのだ。ボーナスの這入った師走の余勢からかもしれない。私も卅年程前、満州に一月ほど居た時、奉天の街頭で「一円」のクジを買ったことがあるが、満州では勝負が早く、一と月もたたぬまに、一円がフイになった。

透視するごとし赤子に見つめられ

（笑　子）

ようやく、物が見えるようになった赤児の目は清らかなものだ。瞳が生き生きとしていて何かを見透するようなかがやきを見せる。俗に、赤子の目には、神が宿ると云われる。だんだん歳をとるに従い、つやがなくなり、散慢な目になったりする。智恵がつくからだろう。こんなことを考えると、人間は、余り知恵がつかぬ方がよいようにも思う。

「透視するごとし」とはよく云った。赤子の目には、心を見透かされる様な気がする。

秋田実主宰・不二田一三夫編集

川柳家に好評！　三月号発売中

「漫才」　増ページしました

定価百円送料六円

発行所　大阪市生野区勝山通六ノ七九

電話大阪（七一八）三二一八

近作柳樽

和歌山県　ふきあげ　虎城

もう帰る客へ合槌あわせとき
実南天わが放心の目を奪う
未だ生きているのかと海老こずかれる
二人三脚噂の人と組んで敗け
泣き言の割に平気な顔で去に

姫路市　前田芙巳代

羽のない矢に射ぬかれて過去を病む
切り札をいつも持ち笑らえない男
そこで終るドラマあなたも人間不信
最後のアングルやはりあなたも裸体

島根県　堀江正朗

これしきの事で眠れぬ夜がにくい
眠いのも老化眠れぬのも老化
光りなき身も父とゆう名に生きて
金魚鉢金魚これでも倖せか

西尾栞選

島根県　堀江芳子

空白にしたい過去ぬくめたい過去
血圧がよければ今度は癌だろか
こんなに倖せでいいのか長男との対話
晴着の娘手で見る夫も泣いている

竹原市　三宅不朽

散ってなお落葉に思惟の裏表
ふり仰ぐ高さ木の実のただならず
あめつちの童話を給うぼたん雪
愛憎の亀裂を子が埋め母が埋め

神戸市　来住タカ子

追羽根の姉妹父に似母に似て
たぎる湯に哀しい女の性を見る
忘れ物して来たような一人旅
暗示呪文となり胸をゆさぶる

奈良市　桑原シゲオ

一番風呂に追いたてられて湯の加減
事業とは言えない商いで喜ばれ
無線タクシー怒鳴られ続けて着きにけり
交通情報悠々空舞い指図する

豊岡市　不二本和久

毒になる酒で心の傷いやす
男なら抱いて御覧とすり寄られ
駅からはもう別々の顔となり
奥さんの全部を知ってる月販屋

鳥取市　藤本鎭也

付き添いの寝言で病人起される
自家用車クイズで貰うと決めて置く
朗らかな娘だネと母の感違い
花圃に佇つ此の空間は僕のもの

大阪市　小谷葉子

灯を消して花の匂いに吸い込まれ
ふる里は遠く賀状に吹雪あり
浮く如く沈むが如く生きてる証し
舞扇タンスの隅でかしこまり

東大阪市　落合思月

伊豆の旅

ガイド嬢の美声天城の空が晴れ
平凡な余生狂わす人に会い
ガムをかむ嫁で姑の気に入らず

岐阜市　市川鱗魚

人の事だから清貧等と言い
金貯めた男　子のない独り言
温泉へ来て逃げ口をきいて寝る

大阪市　和田痴亭

十年を看とらせ愚妻の口が過ぎ

冬登山二吟

老の骨軋ませ雪の尾根渡り
酔うている手が触れたがる人の肩

米子市　林瑞枝

ぼたん雪銭湯帰りの頬で解け
妃殿下でなくて炬燵で舟をこぎ
英才の母ふるさとで地味に生き

岡山県　目賀芳月

満ち足りた目に新雪の温き
お元日女房女になってほし
誕生日ミスで生れたとは知らず

大和郡山市　中内孚彦

友達を失って強気ぶっていた
トンネルの多い人生をてくてくと
自分を殺して生きるとは悲し

大阪市　江城功雄

命ある限り人生の階段昇る
晴れ姿幻だけを身にまとう
生きのびた命しみじみ古寺を訪う
羽咋市　三宅ろ亭

卒業は今は泣かない女なり
合格は首でも取ったように来る
種子売りがきて春先きのプランたて
竹原市　森井菁居

昭和元禄古墳へ続く道が荒れ
見逃がしてやれば図に乗る冬の蠅
春までをポプラは耐える事に決め
守口市　岸本豊平次

嘘には嘘　笑いが乾いている
保険屋と妻神妙に話し込み
他言を封じた話で花が咲き
広島県　岩谷二三枝

満たすもの欲しく句帳に我を埋め
終止符が怖くて破調のままでいる
しあわせが背中合せにある焦り
出雲市　王紫

フグチリの味覚中年の恋に似る
笑わせる脚本むっつり書き上げる
群狼と化す安っぽい正義
大阪市　黒田真砂

チグハグな心が冷えた茶をすすり
まろやかな和菓子に京の街楽し
子へ土産自分の欲しいものを選り
豊中市　河本雪男

金ないが元旦の朝はすがすがし
ヨチヨチがもう反抗の素振り見せ
ダルマの目転んで起きる覇気があり
島根県　小砂白汀

過ぎた嫁に一人むすこを連れ出され
ご気嫌がななめ四角なごあいさつ
そばにいるだけで楽しい弱身
守口市　樋口一峯

紅葉の果てるを知たった美しさ
人間の限界でワンマンバスうごく
金仏壇後の仕草みな写り
大阪市　西本保夫

主任とは嫌な商売板バサミ
社長が押すボタンは試運転の合図だけ
臨時工と気易く話せる平社員
倉敷市　小野克枝

ごめんねと云えばけんかは済むものを
乱れ雲呑んで大きな海がある

咲かぬ花枯野も妥協してくれず
大阪市　河原林　比呂路

借りに来て言葉多きは返えさぬ気
無器用をゴキブリまでにあなどられ
催促に断りによい大阪弁
大洲市　堀内　暁風

交通事故あって二人の仲が知れ
信心と別にお守りだけは受け
億のつく金は万以下省略し
高知県　山川　勝子

十二月医者も容体半分聞き
自家用車しめなわ飾り里帰り
姉よりも妹所望で親慌て
七尾市　松高　秀峰

成人式洋服の娘にある希望
生みの親育ての親あり成人式
物言えば損をするよな会になり
下関市　志賀木石

河豚食わぬ客台所をあわてさせ
笑わせるつぼ心得ている音痴
呼び止めてほしそうな背へ意地を張り
下関市　志賀汀花

リボン取り替えて小猫もお正月
年末を稼いだ腕へサロンパス
ボタ山に心許ない昼の月
大阪市　堀口　欣一

暖房のビルの廊下で坐り込み
屈強な男で南京虫を売り
将軍のヒゲを残したベレー帽
尼崎市　中渓　慶彦

鍵かけておんな仮面を脱ぎすてる
銀婚もオイとアナタで無事にすみ
いじらしい嘘の花束買ってやり
京都市　藤本　征山

見えぬ眼のめがねのグラスよくみがき
新薬のポスター派手なくしゃみをし
肩組んだだけでは娘不服なり
米子市　源氏　勝久

明治日々とまどいあきれて暮すのみ
世話させて置いて勝手に仲直り
美容院やはり五十の顔で出る
鳥取市　藤本　恵子

母さんの遠慮へ私の腹が鳴り
抽選券紛失それが当ってた
コマーシャルおそばほんまに好きやろか
大阪市　加納　楽々

放心の夜にストーブの赤く燃え
判ってるつもりが今日も悔を呼び
　初めて仲人を務めて
仲人をして二昔前語り明け
　河内長野市　小　川　耕　人
コマーシャルだけが大きいカレンダー
適齢期落着いていて親あわて
ホステスの着せたオーバーを脱がす妻
　小松市　四　方　天　弘　美
ぼやいてる続く宴会休まない
改号を仕度いと思う日の迷い
火事見舞燃える現場を得と見て
　西宮市　加　納　聖　司
歳々の子の写真は鳥居前
この奥の露地の奥より四方拝
今朝もまた昨日の反物だしてみる
　尼崎市　中　谷　利　美
母に似た嫁をもらうと喜ばせ
大げさに泣いて戻ったかすり傷
日本人ばなれを競う美顔術
　岡山県　武　元　柳　子
咳一つ風邪を知らせる電話口
昼めしの少し足らねば餅を焼き
かけはずしせわしエプロンお正月
　大阪市　里　小　路
寝ておれぬたちで風邪気が抜け切れず
スキーから未だ帰えらない祝箸
正月の髪三日目の型で出る
　島根県　栂　みどり
うぐいすの初音きそおて春の曲
老いの身をたらい廻しに養われ
ご時勢は親子の義理も金でつけ
　松江市　大　峠　光　春
病棟のあなたにもろく恋と知る
寒椿生け花にして赤い部屋
声たてて笑える中に僕も居り
　鳥取市　両　川　洋　々
不運なる雪は焼場の上で舞い
言い訳が過ぎて陥る自己謙悪
焼鳥の店愛鳥家も酔いに来る
　愛媛県　嶝　本　満　子
涙すまい涙は母の訃におく
ひと言も愛へふれずに去ったひと
胎動の倖せ良人の手にも分け
　神戸市　横　山　孜　孝
赤電話待っている間に気が変り

スモッグを理由に息子は山へ行き
盗作も無くて歌会忘れられ

八尾市　香川酔々

ともかせぎ夫と妻に霜の道
冬ぬくし小銭を探がす販売機
元日のマンホールから人が出て

今治市　原田輝親

妻美容院経営（二句）
髪結いの亭主お客の子もあやし
パーマ屋の亭主うろうろ歳の暮
吊し柿実家からもろたのを貰い

今治市　古野伶人

昼風呂に来れば閑人多いこと
たまに引く紅が知ってる指の荒れ
喧嘩してた声とは見えず電話口

羽曳野市　前川桂馬

捨て値とも知らずキャベツのよく肥り
週刊誌隣席の目に急かされる
枯葉一枚蓑虫足るを知り

羽曳野市　飯田一治

冬休みプールサイドに鳥と犬
七夕の笹が団地で屑となり
ヘヤピースのせて心が変るなら

大阪市　岩井公平

還暦のしわしみじみと初鏡
還暦にしては若いとおだてられ
まだ一働き還暦祝う気になれず

宮崎市　野口卯之助

空くじ恵方の店で買ってくる
老いて子に逆らう意地もなく平和
犬小屋の屋根で疏忽な鶏が鳴き

米子市　八木千代

遅い子を待って夜なべはみぞれ聞く
雪国に育ちいつしか雪を待ち
翼切られても鳥の瞳は空を見る

東大阪市　竹中肖二

犬好きとみてか棄て犬慕って来
食堂に勤め子供とすれ違い

東大阪市　竹中綾女

稲束の積み型違う国境い
正月の歌舞伎晴着の見せ所

堺市　羽田一扇

同じ事又言わされる電話口
三カ日大阪に空取戻し

和歌山市　増田次章

星見えぬネオンの空をかなしとも
明かるさがとりえの妻に救われる

宿毛市　瀬田美知

幸せうすくものの命をいとおしむ
囲うてもふさいでも女一人へすきま風

仙台市　平野光道

屋根に雪凍った貨車来る小正月
道の雪掃かずブロック塀高く

広島県　南条露声

損もする附合のこのこついてゆき
無意無策我月給運搬車

新潟県　高野不二

謹賀新年の中にライバル意識する
ここいらはまだいい方と雪五尺

島根県　大森孝華

結いたてへ粉雪舞つて初詣
出ししぶる財布孫の声であき

堺市　藤谷象園

人影もまばらな宿の年の暮れ
旅なれどやはり気になる年の暮れ

大田市　藤田軒太楼

口下手だから忍従にも慣れ
先方に信じ込まれた人違い

大阪市　藤田頂留子

暮もない正月もない救急車
十円で盗難火難車難頼んどき

京都府　福村飛龍

直ぐおこる父正月を意識する
七草の五つ迄ない七日がゆ

河内長野市　森本黒天子

ウインドの石は老妻をとりこにし
敬老祝二人貰って無事な春

羽曳野市　榎本吐来

子をくさす脇から自慢ちらと見え
うっかりと合槌打てば顔歪み

大阪市　島野大吉

正月の神酒が銚子にまだ残り
福笹に派手に結んだ只のびら

寝屋川市　福富隆子

餅腹のみこしを上げて神まいり
飲んで寝て薬を飲んでお正月

竹原市　出島静波

格子戸の中は明治の世界なり
明治なる女七草を数えたり

鳥取市　近藤秋星

故郷の餅も機械で搗いた餅
口説かれて女自信を取り戻し

兵庫県　高橋近江

一癖が姑の七癖数えたて
会うまでの取越し苦労のあほらしく

仙台市　川村映輝

この雑魚と思えど相手は公務員
故郷は先祖の墓と戸籍だけ

京都府　菊沢破天

まっすぐに歩るけてたらぬ酔の巾

気にいらぬ言葉もうけて春の酒
泉佐野市　大工静子

我が無口自分を殺す事も有り
順番の通りにならぬなじみ客
大阪市　西口漁人

正月も休まぬ職に今日も生き
鳥ハダを立てて見ている寒げいこ
泉佐野市　大工チヨ

母の座は正月が来て花咲かり
酒飲めば一つ覚えの黒田節
松原市　守屋万竿

紅白の歌で一億年を越し
父の手も借りて娘は帯を締め
羽曳野市　麻野幽玄

寺社混同して初詣のバスコース
たいみんぐとは梅咲いたお元日
島根県　志賀美栄

門松もとれて家計簿しめなおし
柔かき鶏冠にゆれる春の色
善通寺市　伊藤歌子

又してもキリスト不在のクリスマス
ボーナスも一晩おうちでねたつきり
岡山県　片山雅子

父ちゃんの模型のような子の仕草
一年の無事を託した星祭り
和歌山県　吉野冨子

後妻来て明るくなった家の中
本能に理性が負けた父性愛
鳥取県　谷無間

旅行から帰ればオーム又来てね
犯人へ故郷の話題して聞かせ
島根県　中島英子

浮気して捨てた故郷を夢に見る
新顔もお国訛りで座がなごむ
竹原市　時広一路

一人佇つ孤独を愛す人なのか
僕なりの計算してる歩巾です
高槻市　山田スミ子

腹の出た方が秘書とはあっけなし
みの虫へ寒風は吹きに吹き
大阪市　田中多幸

言いたいこと言うだけ言わず反抗期
呟やいてお化粧するも年の頃
堺市斎　藤亜也

現代の美女みんな口の大きなる
一まわりして来てもまだ立ち話
岡山県　行吉照路

赤ちゃんにピアノの月掛け始められ
鼻唄でのれんを出れば刺す寒気
尼崎市　平井露芳

農家まだ額に陛下のおわします
民のかまど煙らずスモッグ出る世相
竹原市　脇本政己

遠くより星あたたかいものをくれ
木枯に若き怒りを覚える日
河内長野市　井上喜酔

道草の訳けを聞いたら寝てしまい
季節風うるさい程に戸をたたき
岡山県　本倉英峰

北風に冬の構図の窓ガラス
泥棒も残して行ったにせダイヤ
大阪市　岡本まさひろ

だまされたと思もて買いなはれとだまされる
次ぎ下りるころにバス席ゆずられる
竹原市　生信笑子

恐いからふり向きかねている私
たたずめばなぎさ孤独の音となり
八代市　船木史朗

さア嘘をついておくれと点くネオン
美しい金で細々子を育て
鳥取市　藤本佳女

男っぽい女が街をのし歩き
貧乏を嫌って風邪も寄りつかず
鳥取市　藤本和宏

ベトナムはベトナム僕はテキを食う
どの人も金なさそうな顔してず
鳥取市　藤泰嗣

前歴の強味次点に格差つけ
男女ともかけて宿出るサングラス
鳥取市　谷尾透風

慰めてやりたい人に妻があり
片足で飛んで老化の試験する
鳥取市　河口忠志

貧乏を笑った友が保護を享け
帰省して馴れた大声笑われる
鳥取市　米原一稔

三つまであった眼鏡が見当らず
友情はあるよあるよと出して呉れ
鳥取市　夏目葉舟

遠慮など知らぬ無邪気が又貰い
親の性きっちりうけた子の短気
鳥取市　福山貴恵

お隣りの新築窓まで陰にする
満たされぬ心を包む寡婦の笑み
鳥取市　吉尾武志

鳥の声真似ても小鳥寄って来ず
垣越しに豆の炊き方まで習い
松江市　村松酔歩

男気のないふるさとに雪積る
人間の女の孤独ネコと住む

静岡市　多々良　空

好事魔あり元日の救急車
彼の愛このようだったボーリング

諫早市　原田明春

二次会の酒から因縁つけはじめ
気前よう酌いでその後はほっとかれ

大阪市　有信吐痴男

銀行は多忙に暮せと手帳くれ
追憶はマスコミ任せで年の暮

鳥取県　稲村光枝

二枚来た同じ年賀に苦笑する
成人の娘と夢見る当り年

香川県　西山綾子

悪妻を詫びと感謝の里の母
負けて勝つコツ心得詫びも出来

岡山県　川端晴女

障子ふき姿見となる時もあり
何くそと持っても漬物石は石

長野県　中尾愛

師の一人モナリザに似てなつかしき
初恋は陽炎のごと消えてゆき

大阪市　大池芳

南天の赤い化粧で春迎え
暖冬にふところだけが寒くなり

大阪市　木村久子

聞いて見て浅学の我れ頭打ち
ささやかな家内揃って年忘れ

大阪市　木村濁水

旅に聞くせせらぎ遥な里思う
晴着して親がてれてる七五三

和歌山市　仮家和美

薬塚を解くミレーの夕景画きつつ
しくらめん咲き続くレース編む

堺市　藤井一二三

姉病んで薬の活字浮いてみえ
あの医者は話せる屠蘇の許可を出し

愛媛県　西田父二夫

散髪の首筋なでる山白し
瀬戸の浪岩がどんと来いみんな来い

鳥取県　川崎秋女

富士山もタカもナスビも出ない夢
にっぽんの雪が日本を二分する

大阪市　半田夏生

湯につかるただそれだけの雨の下呂
鶏の目にそこら一粒ずつの餌

大阪市　福田秋風郎

出雲市　板垣草丘

風上へとんちんかんな笑顔する
空気銃なっても雀逃げもせず

京都市　丹羽英二

〈大陸巻談〉

スター走馬灯大陸版

東野大八

さきごろ熱海で、久しぶりに大森義夫と遊んだ。彼の同伴者は小夜福子と吉行和子のご両人。私はみずみずしい吉行クンの方は見向きもせず、もっぱら小夜のおばさまとばかり話をした。かって彼女は宝塚少女歌劇の人気スターで、日本レヴュー史に輝やかしい一頁を記した「モンパリ」の颯爽たる男装の麗人であった。若いころモーレツなヅカファンだった私は、葦原邦子の「サルタンバンク」草笛美子の「花詩集」などをつぎつぎしゃべりだし、天津乙女や雲野かよ子、紅千鶴のウワサ話に夢中になった。

「そんな私がすっかりおばあちゃんで…」と大いにテレる小夜福子に、大森がかっての「事件記者」の八田老人よろしく〝今宵はちと懐しのメロディをやろうかな〟とノンベの本領で、サントリーの角びんを引きよせた。その話の中でいつか大陸にいたスター懐旧談あれこれになった。

北京の東単にバー泉というのがあった。マダムは泉清子。マキノ映画時代、よく落ちぶれた貸元の一人娘になったりした純日本娘型の女優だ。あらまあ、私のファンがこんなところにいたなんて、と大いにモテた。ある雪の夜、しけているこのバーへ、吹雪をまいて二人の男が舞い込んだ。止り木の私とその一人とが顔を合わせた瞬間

「やあ、これはこれは大ちゃん」

「そういうお前は、イヨさんか」

と相擁して男の頬べにキッス。彼の名は近藤伊与吉。むかし「街の手品師」では性格俳優と評判をとった男。時に彼は満洲映画協会の演員科長だった。

「アラ先生、二次会とはウラミマスワヨ」とマダムのお清さんも中からとんで出た。

「おい大ちゃん、紹介しよう。日本の二枚目滝口新太郎とはこの仁だ」

あとにも先にも滝口とあったのはこのときだけだ。彼は戦後モスクワに止まり、岡田嘉子と対日放送で活躍した。

さて、伊与さんと私はのんべ友達だ。彼の親分マキノ満男が、新京ダイヤ街の扇芳会館で、ダンサーの頭に赤ん坊のオムツをかぶせて大騒ぎになった。彼に初めて子供ができたので浮かれぬいた挙句の酔狂だ。かくて地回り四、五人とマキノ満男と伊与さんの派手な立回りになった。このときたまたま居合せた私が助っ人の役をかって出て、以来この二人と大いに意気投合する仲となった。私は当時五体満足でケンカはめしより好きな二十五歳だ。ダンスもちょいとばかりやれた。

マキノの細君は当時有名な女優の星玲子。オムツ事件の縁で、私はよく彼の家へ遊びに出かけたことだが、最初の出会いに足が大いにフルえて、モノがいえなかった。京都で、おばあさんになった岡嶋艶子やおじいになった高松錦之助、池田富保元監督らと座談会をした際、杉狂児もきていたので星玲子の話をした。すると彼、なんで忘れてよいものか、アナタと呼べばアナタと答える、山のコダマのうれしさよ、をハミングして喜んだ。

「お前さん、ホレてたんだろ、彼女に…」

「パピプペ、パピプペ、パピプペポさ」とそのうたの最後のくだりで彼ごまかした。

橋高薫風著

れもん

送料共 五百円

「もしも月給が上ったら」など、新京では彼女のナマの声をきいたことだが今はどうしてござるやら。伊与さんの最後はモヒとアル中の麻雀でいえばリャンファンで狂死した。

時の新京には、北条たま子や、エロ吟こと峰吟子などが、バーや飲み屋を経営してい

た。「女給」で売り出した北条たま子は、これがもともと本職なので、お店もよく流行っていた。この店で作家の林房雄がビールびんでなぐられた。それを私は勤め先の新京日日新聞のゴシップに書いたら、彼エライ見幕で電話で怒ってきた。ところがその後、私は北京新開路の割烹で、中国人の徐白霊らと飲んでいると、奥からひょろひょろと林房雄が出てきた。きれいな姑娘を二人を両手に抱え、彼は酔ってごきげんなもんだから思わず徐の片足を蹴とばした。短気な徐は、なんだこの野郎と林の胸ぐらをとってニラみつけた。すると彼は相手が中国人なので

「貴様は一体何者だ、おれは日本の林房雄だぞ」

とメガネの奥の目玉をロンドン・パリにして憤った。私が仲へ入ってどうやら収ったが、私も人が悪い。新京の北条たま子さんと時々あってますか、といったら眼を白黒させ、私がブン屋だと仲居からきき出すなり

「あのゴシップは貴様だな」

と血相変えて立ち上った。「大東亜戦争肯定論」を書きそうな下地がこのときから備っていたわけだ。

満映では、当時甘粕泰彦理事長が絶対ワンマンで君臨していた。私はこの甘粕さんに可愛がられた。彼は私の川柳だんぎをよく面白がってきいてくれた。私は大体この人の過去が過去だけに、あまり虫が好かなかったが、満映担当の記者だから仕方がない、会うとよく末摘花を披露した。

ある日、この理事長の部屋の隅で、私たちのやりとりを緊張してきいている顔の長い男がいた。どうも気にかかるので、誰方さんですかときくと甘粕さんが、

「役者の丸山定夫クンだ。全満を阪本竜馬をやって歩くそうだ。そうだなあ、君」

といわれたので、彼さっと起ち上り、不動の姿勢をとって、所属劇団と自分の名を初年兵のようにカッコウよく名乗った。「彦六大いに笑う」で爺さんかと思っていた私は、青い背広も若々しい顔なのにびっくりした。

この丸山は広島で原爆にあい死亡。甘粕さんも大杉栄一家を惨殺した暗い過去にふさわしく壮烈な自殺を遂げた。満洲国の閣議の最中、日本から六代目菊五郎が来たというので甘粕さんが国務院へ電話をかけた。

「何ッ、閣議だと、そんなものはあとでいい、全員すぐ新京駅へ出て歓迎のあいさつをしろ」

その一発で、閣議は中止された。そんな超実力者だから、敗戦即自殺より道のない男だったわけだ。

サイレント時代、旧劇の剣豪明石緑郎は大連でモヒ中毒のため行路病者で始末され、帝キネの女優花房銀子は痴情事件で奉天で刺され、木暮実千代が和田日出吉の跡を慕って日本から大陸へ家出してきたり、李香蘭が日本でニセの中国娘だったとビックニュースが全満を騒したりした。そんなころ、私は奉天商埠地の日本人用の風呂屋で、毎晩ゴリラみたいな気持の悪い男とよく顔を合わせていた。あるとき湯舟の中はこの男と二人っきりなので、死んだ気で声をかけたら、なんと彼こそ、私がガキのころ銀幕の英雄で鳴らした鳥人高木新平その人だった。

「わたしや、人造真珠をやってたんですがこんなご時世で、どうやって生きていこうか、目下ルンペンで思案中ですよ」

索然とそう語った彼の顔を今も私はありありと憶えている。

熱海でそんな酒の話に、語ればつきんでしょうがと小夜のおばさまはしみじみとこう述懐した。

「栄華の夢が花々しいほど老醜のわが身はみじめですね。どう、こんなこと川柳にはなりませんかね」

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
高島屋
大阪・なんば・日本橋・四条
東京・
京都・

川柳徳川記（三）

家康（二）

浜松城

元亀元年（一五七〇）家康は岡崎を信康に与え、居城を遠州引馬に移し、浜松と改称した。

元亀三年（一五七二）十二月二十三日、家康は、わずか八千の寡兵をもって、武田信玄四万余騎の大軍と、三方ケ原で合戦し、散々に敗れて浜松城に退却した。その時家康は三十一才、平然自若として、三椀の湯漬に空腹を癒した後、腕を枕に横になって、鼾をかいて眠ったという大胆さが伝えられている。

しかし勝ちほこった武田勢は、浜松城へ押し寄せた。城では門を開き篝火を焚いた。そして家康の四天王の一人、酒井左衛門尉忠次が櫓に登り、トウトウと太鼓を打ちならしたので、武田勢は、何か謀略があるとして退却したという。この話は、芝居や浪曲などで、「酒井の太鼓」として、今でも演じられている。川柳も、

浜松は戸ざさぬ御代の御吉左右（五八17）
はま松は戸ざさぬ御代のはじめ也（安八義1）

浜松は櫓太鼓の三番叟（九六26）
敵の気を呑む浜松の大手口（一三二8）
孔明は琴浜松は高いびき（八〇22）
日の本だけに琴の場を篝也（四三18）
和漢の智謀太鼓の音琴の音（四四9）
面白く敵をあざむく撥と爪（七二30）
竜虎の勇智漢の琴和の太鼓（一六七1）

などと詠み、諸葛孔明の故事と並べている。

あだかもその日は節分であったが、敗軍の浜松城では、万事整わず、柊の代りに、仏前へ供える楯に鰯の頭を添えて門に挿した。これが嘉例となり、徳川家では、毎年節分には、柊の代りに楯を用いることになったのである。

御開運仏花を門トへささせられ（一〇〇14）

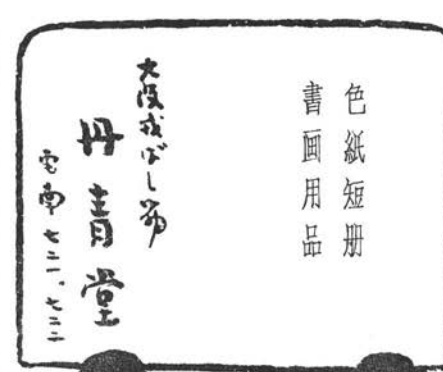
楯めでたく赤いわし鞘に入り（九三36）
年越も木扁に密な御計策（六四22）
節分に遣ふしきみは生きて見え（拾初29）
下々ならば忌むべき枝を御吉例（安元礼1）

と川柳もそれを詠んでいる。

長篠の役

天正三年（一五七五）家康三十三才、二男秀康が生れた。母は池鯉鮒明神大宮司の女である。

この年、甲州の武田信玄の子勝頼は、家康の臣、奥平信昌の守る長篠城を包囲して攻めた。その時奥平の家来、鳥居強右衛門勝商



は、夜、単身、堀の水底を潜って重囲をぬけ徳川・織田の両陣営へ行って急援を乞い、帰城の途中で、武田勢に捕われて磔殺された。けれども織田・徳川の両軍が、武田勢を粉砕して、長篠城は落城をまぬがれたのである。その鳥居の殊勲は、後世にたたえられ、

忠義には鶏の真似もした鳥居也（五三29）
水中の鳴子がすねへ度々さわり（八九10）
忠臣は末世に朽ちぬ鳥居なり（六三12）
忠義にはすねに鳥居のある男（三二36）
忠臣の鳥居心も石のやう（七四21）
忠臣にかけても強い鳥のすね（七九28）
鵜の真似をした忠臣は強右衛門（二三四10）

長篠から夜通しとすねをさすり（二一15）
忠臣の鳥居は朱になる覚悟（一五七2）
長篠であったら鳥居打たをし（七五5）
鳥のすね一本で城持こたへ（四一11）

と多くの川柳にも賞吟されている。なお奥平信昌を、

九八郎身には鳥居が百万騎（一六一22）
九八郎神より鳥居拝むなり（七七16）
奥の手を出さす長篠持こたえ（傍三5）
軍配がよさに長篠持こたえ（傍三28）
軍配のよさに鳥居も越す気なり（九九16）

と詠んでいる。「九八郎」は信昌の名で、「軍配」は家紋である。信昌はこの武功によって、美濃の加納の城主となり、家康の長女亀姫を妻にもらった。

長篠の武功は御意に加納なり（一〇一40）

徳川の威力も、このころから発興したといわれ、

強右衛門を捕へた甲斐もなく負ける（一八20）
長篠へ後詰破竹の御威勢（八一24）
長篠の頃が破竹の御威勢（一五九32）
長篠で武田の仕掛け糸が切れ（五三8）

と、武田を破るにかけた狂句になり、日本外史にも大きく書かれてある。

・川柳塔社常任理事会・

三月四日六時から、本年初の常任理事会が開かれた。今月のテーマは二賞の準備と、こんごのあり方である。

石原青竜刀氏が〝しなの〟九月号に、本誌の二賞について、好意的な一文をものされたのを他山の石として、今月の理事会に提出したのである。

昨年十月号から本年一月号までの四カ月間から、約十句を四月号に中間発表し、二月号から五月号まで—六月号から九月号までと、二賞候補作を年三回にわたって発表することにきまった。二回目の中間発表は七月号の予定で、二賞がきまるのは例年のように十月号である。とくに強調された点は選者級の作品でも優秀な作品は候補作にとりあげるということだった。

路郎賞は春巣、栞、小松園、好郎、多久志諸氏。川柳塔賞は没食子、水客古方、薫風、白柳諸氏が選考委員。委員長は生々庵主幹。

そのほか、文字どおりの同人制にするため、苦楽を同人が共にし、選者級も一般同人も〝一つ〟であるという機運がもり上ってきたようである。

出席—好郎、古方、文秋、白柳、多久志、生々庵、一三夫諸氏。

句集「白黒記」

橘高薫風

著書には藤村青一句集「白黒記」とある。詩人藤村青一を前に押し出したのだろうが、われわれ川柳人には高鶩亜鈍の方が親しみ深い。亜鈍という底の抜けたような名は、生前の路郎先生をもたじろがせた傲慢さと一本気な性質にふさわしい。旧鵬某日川柳塔社で来阪中の著者と歓談した。彼は白い杖を持っていたが、その頭には蛍光塗料ようのものが塗ってあり、コードがぶら下り、スイッチを押すとランプが点いたりブザーが鳴ったりするような趣のものであったが、それは外見のみ。

「早うからそいつには電池も何も切れてしもうてて、用をなさんのですわ」と呵々大笑するのであった。盲になっても人を喰った性質は変ってはいないのである。私は亜鈍健在が何より嬉しかった。亜鈍さんが盲になってしわしわしてしまっているのなら泣くにも泣けない。それ故、故香林氏のようにしずかな冷徹した句は同じ中年からの盲目という環境にあっても亜鈍さんには作れないのである。彼は阿倍野句会当時、香林氏の句の

頬にふれるは秋のてのひら　香林

を殊の外絶賛していたが、今にして感慨深いものであろう。亜鈍さんは犬猫に深い情愛を傾ける。かと思えば若い後妻との愛の生活私生児という己の境涯にのたうつ。白黒記の白は白杖の白、あらぬ方へ据える盲人特有の姿など、云わば外形を示し、黒はその内貌を示す暗を象徴している。深い苦悩の積み重ねの後に、

ひとみんな小さい蠟燭もっている

の句の如き安心の境に辿りつかんことを。

空漠を分け入るように耳そうじ

首巻で小犬を抱いて風に入る

オリンピック敗者のなかにわが姿

電気炬燵で秒音をきく

りんどうの花きづかずに失明す

手さぐりで知るには深い奈落かな

僕ひとりで歩くから見ていて欲しい

沖天の月は白旗かかげてる

白と黒乳と蝿なる天地かな

白黒のまんだらであるいのち綱

骨片を拾うが如く詩を撰ぶ

目あきから慌てられては立つ瀬なし

どん底でルカ爺さんはひなたぼこ

血統は犬や馬　人はバラバラ

悪さかん同年同月生まれの大臣閣下

梅漂と薬家支えて神の家

復員をして日本の草を食い

大もうけした夜朝鮮語にかえり

犬の舌やや縮まって夏終る

題名のとおり、戦前、戦中・戦後の時代を経た著者の足跡が、格調高い批判詩として、次々に展開されてゆく。川上三太郎先生の序に「彼はこれ帥（すい）の器」と云われているが、句とともに小文も味わい深い。

定価六百円。

後藤閑人著

句集「あしあと」

連綿として貧乏の血が流れ

冬の蝿あわれ蔣介石に似る

川上三太郎先生との出会い

直原七面山

昭和四十三年九月七日（二十周年記念西日本川柳大会の前日）の夕方、私は名刹誕生寺において川上三太郎先生にお目に掛った。

その日先生を玄関にお迎えして客殿に伴った。そして先生がタバコに火をつけられるのをお待して、先ず自己紹介に及んだ。

すると先生はニッコリお笑いになって「ああ！音に聞こえた硬骨漢の直原七面山君とはあんたのことかね！ふーん、なる程」と言われたきり、しばし言葉もなく、ジーッと私の顔を感慨深かげに見詰められた。

そこで私は「お目に掛るのはこれが初めてですが」と申し上げると、先生はお手を横に

振りながら「いやいや！君のことはとてもよく知ってるよ」と仰言る。

その一言で気拙さは一遍に吹っ飛んでしまい柳論に花を咲かせた。

それから一時間半。私達は誰れに邪魔されることもなく、ゆっくりとお話をすることが出来た。

その時先生は、とても熱のこもったお言葉で、柳界の動きについて語られるとともに、これから先生が情熱を傾けて成されようとするいろいろのプランについて、直弟子でもない私に、とても詳しくお洩らしになった。

それをお聞きしていて私は、現代日本の川柳界の最高峰に位しておられ、しかも相当お年を召されておられながら、なおも川柳探究のために、身を挺して挑戦されようとしておられる先生のその心構えの偉大さと、そして類まれなる情熱の烈しさに、ただただ頭が下るのみであった。

また先生は、私の拙い柳論に対しても謙虚に耳を傾けられ、なおかつ極めて適切なる御助言をもして下さいました。

私は先生に接していて、しみじみ麻生路郎先生によく似ていらっしゃるなと思った。

それは外でもない。川柳に対するあの〃厳しさ〃という点において。また人格の高潔さと冷徹さという点において。思えば両先生ともともにこの世にはもう居られません。

恐らくお二人とも、遥かに高いあの雲の峰から下界をご覧になって、各流派のみにくい抗争にさぞかし眉をしかめておいでのことであろう。

私と三太郎先生との柳縁は、一瞬と言えば本当に一瞬の間の出来ごとであった。

がしかし、その短いつかの間の対座の中で私の得たものは誠に大きなものであった。

それはやがて、日を追い月を経るに従って、私のものする作品の上に顕われ影響を必ずや及ぼして来るに違いありません。

和と心重ねて 巨塔 雲を抜く

—川柳塔社在阪役員懇親宴—

一月二十八日、心斎橋大成閣で新年宴会が催された。福井野迷路、羽原静歩両氏から清酒のご寄贈があり、ご厚志深謝。

心は一つの結束を固め、柳界の東方に指針を向け、共に精進を誓いあった。この日、出句されたのを白柳氏が選をされた。

境界を越えて和合に光る月　葉子
歩巾をそろえてゆく足音のたのもしく　小石
一つ心よコンピューターの世の中の　薫風
ビール林立させて心は一つ　同
寒行へ心は一つお題目　多久志
税金をうらむ気夫婦らしく合い　静馬
また浮気心は一つと云うけれど　好郎
宿敵へ心ひとつにして当たり　庸佑
一隅を照らす光に融けてくる　古方
二人だけ世界の音はみんな消え　小松園
一心のねがい沖縄という首相　摩天郎
矢を三つ古人の訓え今さらに　一三夫
偶像があつて一つになる心　形水
心は一つけどどこやらが融けなずみ　古方
佳
上意下達心一つを押しつける　文秋
見ず知らずと心一つになつて飲み　摩天郎
和と心重ねて巨塔雲を抜く　一三夫
秀
社長だけ心は一つと信じてい　好郎
軸
なぶるのはよせと心は通いあう　白柳

出席—小石・多久志・栞・古方・静馬・白柳・薫風・小松園・庸佑・文秋・形水・摩天郎・春巣・一三夫・葉子。

磨かれた伝統の味

御菓子司
鶴屋八幡
本　店・大阪市東区今橋5・電話（203）7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話（261）3996
売　店・各百貨店のれん街

切手

山本立児選

オチョボ口切手やんわりなめて張り　露声
速達へ膏薬のように切手はる　光道
切手封入漢方薬をとりよせる　春日
蒐集家に切手は使うものでなし　不二
指サック切手器用にさいてくれ　宵明
珍らしい切手湯呑の中に浮き　宵明
切手貼る舌ラブレターの顔でなし　与根一
故郷からの小包切手派手につけ　与根一
発売日切手マニアは見逃さず　初甫
切手代不足分だけ蛇足かも　公輔
三枚も切手を貼つて娘に便り　富隆子
唯一の証拠切手の日付印　輝親
珍らしい切手兎も角貯めておき　肖二
手紙より切手が欲しいとも言えず　肖二
切手蒐集いつの間にか子につがれ　綾女
子に切手頼めばガムも買うて来る　幽谷
潔癖のくせに切手をなめて貼り　恵二朗
ラブレター添えた切手に気を損じ　光枝
ありったけの心切手のたかに見せ　凡九郎
低額の切手でデザイン親しまれ　弘生
大砂丘切手になつて人を寄せ　和宏
郵政省記念切手で稼ぐ腹　透風
遠い日の五銭切手が呼ぶ高値　佳女
友の文記念切手でなお嬉し　貴恵
古切手焼いた後から価値を聞き　忠志
請求書運ぶきれいな切手なり　洋々
ハートみんな貴方へ送る切手貼る　瑞枝
赤い舌嘘の便りの切手舐め　無聖
消印ですぐに居どこが割出され　暁風
使い忘れた切手高値で引き取られ　素身郎
返信用切手を替えておくマニア　保夫
パパとママ結んだ三銭切手剝ぐ　葵水
切手別納商魂いつぱいつめて着き　白汀
怖いほど切手を貼つた裁判所　木魚
さまざまな意匠切手も装いぬ　秋女
もう五円はらねばならぬ程に書き　映月
十五円貼つて十万無心する　どんたく
切手今日二人の粋な橋渡し　同
切手まで入れて返事を強いてくる　軒太楼
ここまでは父が集めた切手帳　奇童
不足料とられてもいいラブレター　芳仙
ささやかな慾が切手に列つくり　史朗
切手売る窓へ愛想のない男　雄々
考えがあつて切手を張らず出し　七面山
佳
取り急ぎ切手歪んで貼られて来　与根一
この切手がねとマニアへそつけなく　庸佑
筆無精に書かせてほつと貼る切手　瑞枝
消印の漏れた切手をはがして見　品充
ラヴレター用の切手と知らず貸し　七面山
人
切手まで貼つてポストへまだ迷い　正朗
地
二十円貼つてどつさり祝われる　恵二朗
天
儲らぬ顔で切手を売つてくれ　旭峯

芽

間島青丹子選

山椒の新芽は惨くもぎ取られ　代仕男
トルコ風呂出れば柳の芽がしみる　雄々
仏壇の木の芽が2DKに満ち　可住
芽の出ない不運を人のせいにする　透風
少し芽が出たと何やらさげてくる　里風
何の芽か茶の間の話題にして育て　弘生
可愛さに雑草の芽を摘み残し　同
おおい芽よここ大阪のド真ン中　葵水
剪定をいずれはされるのに新芽　素身郎
まだ出ない芽もあり愛の手を添え　柳子
旅愁ふと名もなき草の芽を愛す　旭峯
伸ばす芽のためにふびんな芽が摘まれ　千翁
捨てられたとこでサボテン芽を伸ばし　芳仙

ほれほれここにもあそこにも弾んだ声が見つけた芽　凡九郎
芽のついた造花もまぜて春を出し　シゲオ
植木鉢こころあたりに芽がほしい　木魚
温室の若芽は雪も知らずのび　英子
気にいらぬ風にも素直な柳の芽　同
空箱へ忘れた芋の芽がからみ　瑞枝
摘んだ芽が異郷で深く根をおろし　吐痴男
育つ子の自我の芽生えが手を拒み　同
朝顔を蒔いて三日がもう待てず　みのる
箱庭の芽に早やばやと札を立て　保夫
日蔭とも知らず育たぬ芽を伸ばし　光枝
それとのう春の芽生えを病夫に見せ　同
人生悲し芽の出る頃に逝つた妻　魚山
老夫婦木の芽田楽分け会うて　春日
活花の梅も芽が出て捨てられる　暁風
芽が出れば苦労話しもネタになり　雅子
逝つた娘が植えたバラの芽出で哭かせ　礎山
　佳
葉ざんしよの新芽を添えて旅の膳　初甫
老梅の枯れたふりして芽を出して　同
芽を折らぬ様にくわいを煮る晦日　綾女
捨てられた種とは知らず芽をもたげ　与根一
芽の出ない夫なれども満ち足りる　一二三
　人
左遷とは知らぬ社宅の椿の芽　雄々
　地
初産をいたわる母の木の芽和え　十九平
　天
芽のどこにあるのか大地を割る力　暁明
　軸
温室の隅で芽をふくこぼれ種

人　情

直原七面山選

人情がここにもあつた裏長屋　無聖
人情に遠く税務署税をかけ　瑞枝
さりげない言葉にこもる人情味　佳女
人情が互に厚く援け合い　和広
人情につけ入るように無心言い　政夫
許し合うミスも親子の間柄　柳子
人情の厚い店主でよくはやり　鶴丸
人情にもろく浪曲好きな父　鶴丸
迷い子にパンを与えてママポリス　勝子
発展の村が人情忘れさせ　品充
状況不利で人情論をふりかざし　頂留子
人情にもろくテレビに貰い泣き　祥月
人情に負けてと汚職小さく言う　どんたく
人情に目かくしをして差押え　芳仙
人情を嘲るように債鬼責め　誓二
人情がからみ無愛想にも出来ず　葵水
人情を涙で受ける身の落ち目　勝子
人情を尋ねて老いの住居決め　多蘭子
人情の機微へつけ込む詐欺の智恵　暁風
母さんが泣いて人情劇が済み　克枝
温情の判決に泣く被告席　代仕男
人情にもろく万年平社員　与根一
人情にほだされ黒を白と言い　正朗
人情が財布を空に仕て帰えり　礎山
人情も計算してる知能犯　与根一
世をすねて人の情が受けられず　初甫
人情も薄く孤独の人となり　初甫
人情のよさが長屋を捨て切れず　宵明
薄情な奴だがほつたらかしてもおけず　露声
名人の人情噺に目をこすり　十九平
人情に溺れとうとう敵味方　千翁
赤い羽根まだ人情は地におちず　礎山
　佳
人情に脆ろく貧しい日を送り　春日
人情がまだまだ生きていた長屋　秋女
人情に泣いて貧乏には泣かず　幽谷
人情のもろさを詐欺につけ込まれ　代仕男
子の夢を叶えさせたい手内職　英子
　人
落ちぶれた眼に薄情な人ばかり　旭峯
　地
限られた命我がまま聞いてやり　英子
　天
人情に負けて返えらぬ金を貸し　洋々
　軸
人情に溺れて理性を見失い

初歩教室

題——「年頃」

菊沢小松園

制服を着ても年頃見つめられ　露声
年頃も同じ娘を持ちうまが合い　秋女
年頃という束縛に身をゆだね　克枝
年頃が居て御近所へ腰低く　葵水
年頃は聞かれた齢をぼかしとき　失名

①人間を格一に取扱う為の制服であるが年頃と言うものはそれおも破って目立つのである見詰められる当人の得意も思われて微笑しいこの題から制服を配されたことに感心する。②母親同士の長話の材料に同じ年頃の娘を持つ共通点があってはうまも合うであろう。③この娘にそう取れたのであろうが束縛とはなかなかに手厳しい。④娘を持つ親の何と気苦労なことか、調子の整った句になった。⑤女に齢はない世智に長けた娘の機転も面白い。

年頃がそっと二階へ行つたまま　徹也
親の気も知らず年頃ダンスだスケートだ　多幸

年頃の客へ年頃気がはずみ　瑞枝
用心が過ぎて色気のない娘に育ち　光枝
年頃の娘があり苦労絶間なく　孜孝

①多感な年頃の動作がよく出ている、中七のそっとがよく利いて四囲の案じ顔も想像される。②これは積極的だ、同じ悩みを次元にしても性格の相違は派手に衝動的にさえなるが本人は案外考えているのであろう。③若い同士ではよく喋る話題も共通のものを持っている年頃の一面は突いているがやはり浅い。④親の用心が過ぎて年頃らしからぬ娘に育った悔をも窺えるが青春の疎通には親の目の届かぬ処へ漸進して居るのかも知れない。⑤その儘を句の形にしただけで何の感興もない、その苦労の具体化にこそ作句の楽しさがあるのだ。

理想像父に求めて娘ははたち　八郎
振袖もミニも似合う娘あつて春　すき
年頃になる日を想う児の寝顔　千代
嫁がぬ気になつてベツドへ派手に寝る　秋月

年頃という名に女踊らされ　孚彦

①この父は幸だ娘に理想像にされた親は近頃珍しい平穏な家庭の情景。②止めの下五が新春の句らしくてよい、句のかたちは正月の句但しこの句法で繰り返しては危険。③寝る幼児から年頃の日を連想した親の希望感だがその頃の自分の年輪にまで思い及ばぬだろう内容があっていい。④上五で内容の深さに触れるままよと寝るに下五の派手が冴える佳句。⑤年頃というものの如何にも力強いものであるのかそれが此処ではその儘罷り通って居るような句である。

年頃が三人寄つて騒々しい　洛酔
ほれぼれと親も見とれる娘に育ち　誓二
近所みな年頃になり初詣　多蘭子
年頃が次から次へ子沢山　比呂路
年頃もあつたと鏡の顔へ言聞かせ　美代

①女三人よって姦しいでは余りに古いこの想から早く前進すること。②中七に苦心のあとはあっても古いこの境地を脱却されるように③中七に推移を現わして平凡を遁れる苦辛の痕は見える情況は美しい春の景。④子沢山では年頃が次ぎ次ぎ、親も大変年頃もこうなれば味気ない。⑤自慰的な諦観が句の中に漂うて句主の人生観も確かに落ち附いている心の

入会のチャンス
新学期開始！
三月第一週より六カ月速成
毎水曜日午後七時～九時
（規則書贈呈）
大阪市南区大宝寺仲之町一丁目
誓得寺内（〒番号五四二）
電話㈹七一二八
関西奇術教室
校長　村田瓢太

豊さに触れるようだ。

年頃を親より世間ほつとかず　軒太楼
年頃と言うだけのことで見詰められ　静子
年頃と他人が決めて貰いにき　輝親
年頃になつたを他人様が見附け　白汀
羞らいも年頃らしく遁げてゆき　吐痴男
年頃の娘が出た電話で叱られず　保夫

①世間の御節介を句にしただけ。②世間の興味の眼は責任のないうるさである。③親の迂濶さと他人の世話焼き対照の面白さは出て居る。④⑤①より⑤まで同巧異曲平凡であり可もなく不可もない感銘の無いままで終ったようであるもう少し掘り下げの利く句材を選ぶこと。⑥これにはやや背景がある抗議か捻じ込みか、電話の対手が年頃らしい声だったので怒鳴りもならずと言うのである。ある情景が想像される句になっている。

年頃の娘を持つ同士でうまが合い　肖二
年頃と言う枷を跳ね返えし　綾女
年頃の娘が居てのぞくウヰンドウ　正朗
明るさを捨てず年頃母代り　芳子
振袖へ父の力も借りられる　茂美

①親馬鹿丸出しで案外自慢話しでうまを合している場合も多い笑われて居るとも知らぬ親同士の真面目さが反って微笑しい。②昭和ッ子の面目は年頃の枠からはみ出している少なくとも明治の眼からは。③娘の為めに気になる陳列窓も高根の花にしても覗くのである、傷ましい親の心。④母の亡い姉娘は望まないのに主婦代りであるけれども健気にも朗らかに明るく一家を切り廻して居る叙法の整然さが内容を明確にした佳句。⑤和服の流行で生れた句だろうがよくある情景で既に言い古されて損、ただ父を引っ張り出した処は少し眼先が変ったが。

会う人が年頃としごろ押し附ける　凡九郎
セーラーを脱げば年頃の顔になり　万竿
尻からげ老婆にもあつたか年頃　破天

①好んでなった適齢期でないのに他人は兎角年頃を押し附ける当人には至極迷惑なのに、下五に句主の意があり句も生かされている。②セーラー服を脱げばもう年頃、女の線になっている軽い親の驚きがよく出ている。③梅干も鴬鳴かせた頃もあり年々歳々人同じからず往時芒々夢の如し、夢が真か真が夢か十七字また真味深しか。

振袖の似合うきりようで気が疲れ　選者吟

伸、多年に渉ってこの初歩教室を御互によい勉強の場として来ましたが、今月限りで担当を本田恵二朗氏に御願して一先ず辞めることになりました。何分の私、意はありながら御期待に副わぬ点も随分ありましたこと御詫びすると共にこの間各地の方々より色々と御親切な御指導御進言を賜りましたことを深く御礼申上げます。恵二朗氏は川柳雑誌時代よりの人も知る重鎮、その造詣の深い川柳の真随を健筆に生かして必ずやよき指導者として新風を送られますことと信んじます。御期待下さいますよう。

小松園記

★

三月二十日締切・五月号発表
題「純」

四月二十日締切・六月号発表
題「音」
宛先―〒711倉敷市下津井三五二
本田恵二朗

★

服部十九平氏
交通事故で急逝

川柳塔社参事服部十九平氏（岡山県）が二月二十五日午前九時十分逝去された。二十二日自宅付近の国道でライトバンに轢かれ、岡山最大の川柳家を失った。葬儀は三月四日。謹悼。

喫茶
グリル・ラウンジ
パーティ・ラウンジ
展示会場
喫茶・グリル・ラウンジ
御門
GYOMON
心斎橋大丸・そごう東入る
TEL　271―6684

第二百十二回（四十四年度第二回）

大萬川柳「重役」

入選発表

選者 清水白柳

投句総数 七百九十六句

入選 七十三句

豊中 古方

抜け目無さすぎて重役になれず
大阪 あいき
重役が去んで末座のかくし芸
大阪 滋雀
重役の笑顔に不吉の予感する
大阪 小松園
余興だけ覗きに重役顔を出し
大阪 薫風
重役室また東大の話が出
今治 青女
重役のポスト確約してスパイ
東大阪 敏雄
七光りの重役先代と比較され
鳥取 法泉子
ここからが重役コースクラブ振る
大阪 野迷路
重役の子は秀才で反代々木
堺 天笑
生え抜きの重役人事へ行きとどき
倉敷 里風
重役の椅子が空いてからさわぎ
松江 酔歩
岡山 一声
重役の息子で実力にはふれず
羽曳野 吐来
重役の靴は重たいものと知り
高槻 静馬
社外から目付け重役くる落目
仙台 光道
重役に会えばわかると黒眼鏡
大阪 慶之助
重役の射程距離まで来て定年
大阪 文秋
重役が一人からんでいる汚職
尼崎 利美
重役の趣味に日曜棒にふり
倉敷 克枝
重役の椅子をもらつて齢を知り
大阪 生長
重役も現場おやじと親しまれ
熊本 芳仙
重役が何だと辞表胸にあり
大阪 水客
株主総会あわれ重役眼鏡拭く
丸亀 柚蘭坊
香港へ重役一寸用が出来
岡山 久米雄
重役の妻で出しやばる癖を持ち
米子 千代
重役の名で子会社に追いやられ
羽曳野 桂馬
重役の一桁違う処生観
倉敷 恵二朗
堺 一二三
うち中が重役株式会社です
伯父叔母も重役にする小企業
米子 雄々
学歴の無い重役を不思議がり
兵庫 和久
仲人が趣味で重役慕われる
鳥取 透風
重役の名刺を出してから口説き
倉敷 旭峯
社内誌の隅で重役ひねられる
藤井寺 吸江
重役の名も知らないでストに入り
富田林 花梢
重役になつてもあだ名で呼ぶマダム
和歌山 葵水
寝に帰るだけ重役の門がまえ
大阪 弘生
重役が茶を入れている人不足
大阪 小路
祝宴にだけ顔出す非常勤
酒癖がたたり重役コースそれ
出迎えの車で重役朝を読み
大阪 阿茶
一族が重役という所得税
重役になる頃糖尿ひどくなり
倉敷 十四雄
やつと重役になれば合併案が出る
日曜を訪えば重役土が好き

非常勤重役盆暮決算期

重役と歩く日僕の靴みじめ
大阪　旅風

新任の重役名刺よう使い
重役と言う体面がさす普請
米子　瑞枝

方言で今日は重役孫の守
重役の訓辞は過去へふれたがり
大阪　柳志

重役が変り主流に遠ざかり
盲判押さぬ専務の作業服
重役も唄うてみたい労働歌
佳句
和歌山　葵水

閨閥に座し重役のはしにいる
宝塚　ゆきを

下請けの重役若い課長に呼び出され
目礼を返す重役親しまれ
西宮　多久志

重役になつて女房の愚痴がふえ
大阪　水客

銀行を呼んで重役室静か
人ノ句
和歌山　虎城

重役と一緒でエレベーター暑い
地ノ句
大阪　小路

重役でなかつた頃の父が好き
天ノ句
米子　瑞枝

手ぶら癖ついて重役荷を忘れ
選者吟
重役に職人気質気に入られ
鳥取　鎮也

大萬川柳四十四年度第二回

ベストテン（二月現在）

一	文秋	大阪	八、〇
二	柳志	大阪	七、〇
三	瑞枝	米子	六、〇
四	小路	大阪	六、〇
五	千代	米子	五、〇
六	水客	大阪	四、〇
七	青香	堺	四、〇
八	秋月	岡山	四、〇
九	多久志	西宮	三、五
十	葵水	和歌山	三、五
十一	史好	大阪	三、五
十二	旅風	大阪	三、〇
十三	阿茶	大阪	三、〇
十四	弘生	大阪	三、〇
十五	虎城	和歌山	三、〇
十六	里風	倉敷	三、〇
十七	花梢	富田林	三、〇
十八	小松園	大阪	三、〇

以下略

昭和四十四年度第四回

「時刻表」　五句以内
締切　三月二十日

第五回
「湯気」　五句以内
締切　四月二十日

投句先
大阪府高石市高師浜三丁目五ノ六
郵便番号　五九二
川村好郎

これは又

桜川不水

郷里熊本のお寺さんは俳句がお好きで、おりにふれ私の川柳と交歓しています。これは昨年夏の事で、暑中見舞に「冷奴しずくがヘソをあわてさせ」と一句添えましたところ、早速お寺さんから「しずくがへり」とは妙、感服の至りとおほめの言葉をいただきました。これは又どうした事かと、よく吟味してみましたら、問題は臍をカナ書きにしたヘソにあり、お寺さんはへをえとされ、ソをりと読まれた為「しずく返り」となったわけです。なる程これは面白いなと思い、後日お寺さんにあやかって「冷やしむぎしずく返りにチトおどけ」として川柳塔に出しましたところ抜けましたが、前の冷奴の方は見事没でした。

去る十二月号古方さんの「カナ書き恐るべし」を拝見し、カナもうっかり使えないなと痛感した次第です。

★

▼小川静観堂氏（伊丹市同人）は、死んだ女房って恋しいもんですな——と。生死一如五十年の女夫仲——静観堂。

▼米子映月氏（今治市）は岡大田中外科で手術されたが経過良好の由。ご全快を祈る。

柳界展望

あちらからこちらから
お便りを待っています。
（橘高薫風・担当）

▼ふあうすと川柳社創立四十周年記念川柳大会は、第十四回全国川柳作家一万句集公募、誌上大会、同人総会、記念川柳大会などの企画で大々的に催される。一万句集公募は、自選十句に氏名雅号（ふりがな要）住所年齢職業を明記、参加費四百円同封の上、三月末日までに大阪市東区南新町二の二四橋本言也宛。誌上大会は兼題鮎大井正夫選・迎える増井不二也選・音房川素生選、と雑詠橋本言也選・雑詠葵徳三選・雑詠鈴木九葉選、各選者へ三句宛、雑詠は同一句を投句しないこと。原稿用紙半截大の用紙、各題別紙に選者名、投句者住所雅号明記の上四月末日迄に神戸市長田区五位ノ池町一の一〇ふあうすと川柳社四十周年記念大会宛。創立四十周年記念川柳大会は、七月六日（日）午前十時から神戸市生田区下山手通四丁目兵庫県民会館九階大ホールで開催。兼題は港・汗・指・地下街・女・組む・飛ぶ、席題三題、兼席題各共二句以内（投句は出席者のみ）会費三百円。

▼椙元紋太先生から――毎号の充実ぶりお喜び申しあげます。何とか四十四年を期し活動を斯したくぐべんたつのほどを。

▼川柳岡山社創立三十周年記念全国川柳大会第一部誌上大会雑詠の部選者は、大野風柳・堀豊次・鈴木九葉・時実新子・大島濤明の諸氏、題詠と選者は、薬・直江武骨、圧力・佐藤正敏、道・清水白柳、ふるさと・柴田午朗、追随・藤原葉香郎、雑詠題詠とも各二句ずつ、雑詠の同一句の出句は禁じられている。投句は四月十日厳守、百円封入の上岡山市津島岡大官舎H三の七川柳岡山社全国大会係宛。第二部討論会は六月一日（日）午前十時から正午まで岡山市後楽園鶴鳴館ほかで開催、第一分科会、「柳誌の経営とPRについて」議長、延永忠美・萱野竜児第二分科会、「各柳社の主義主張について」議長、服部十九平・田中好啓児、第三分科会、「作品の傾向について」議長、丸山弓削平・寺尾俊平、第四分科会、「初心者の指導について」議長、岡村久志良・松村万古、総会は午後一時から五時まで大森風来子・逸見灯竿の綜合司会で分科会の成果がまとめられる。

▼第十六回大萬川柳大会が二月二十三日、故梅里宅で開催。五四名の盛会だった。

▼第十八回西大寺会陽川柳大会は二月十五日（土）午後六時から西大寺鐘紡労働会館で開催、十九平・灯竿・久志良の同人諸氏が選者として出席された。

▼下関一杯水川柳会の昭和四十四年初句会は一月十九日下関市関西町光明園で開催。

▼島川柳会新春句会は一月十九日に。

▼後藤柳允（黒石市）、片柳哲郎（福岡市）両氏を囲んで一月十九日横浜の中野懐窓居で小会が持たれた。福岡阿弥三・北村雨垂・竹内天道諸氏の名の寄せ書きを頂戴した。

▼ひらない川柳新春句会（青森県）は一月十三日工藤安亭居で開催。

▼工藤安亭氏（本社同人、ひらない吟社主幹）は一月二十九日午後五時十分、食道静脈瘤破裂で手当の甲斐なく急逝、行年六十五才。氏は東京歯科医専では相撲の主将で満洲時代は天竜から教佐の称号をまで受けられた。川柳は昭和二十三年引き揚げ後始められたが人柄だけに誰からも敬慕されていた。青森県柳界の大きな損失であると云える。葬儀は二月二日に執行された。謹悼。

▼弓削川柳社（岡山県）元会長の佐藤竜山坊氏の離町により第六代会長に片山巷雨氏が就任、新たに副会長制をしき横部牛歩氏が推された。事務局、編集は従来通り長谷川紫光氏が担当される。

▼名古屋川柳社の寄稿交換誌等すべての文信は、名古屋市南区桜台町一丁目三五

玉造川柳会
時　三月十日（月）　午後六時
題　迫力・けなす・奥
所　玉造交差点　南一〇〇米　大阪信用金庫

堺・若芽合同句会
時　三月十三日（水）　午後六時
題　水・珍客・納得
所　堺市九間町　山ノ口筋　八木摩天郎宅

南海川柳会
時　三月二十日（木）　午後六時
題　白バイ・ゆとり　もらい泣き
所　ナンバ高架下　親和クラブ

南大阪川柳会
時　三月二十日（木）　午後六時
題　人間・抜け道　新型・上役
所　生野区北生野町一ノ五　乗願寺　国分町東三〇〇米　文秋居近く

鈴木可香方名古屋川柳社宛へ。

▼川柳ジャーナル二月号は清原祐志哀悼の特集をもって、若くして世を去った純粋な故人へのはなむけにしている。

▼川柳たましま誌は二月号から秀句シリーズを設け、中島生々庵主幹推薦の句を表紙に掲載。

▼「せんば」（大阪市）一月号琥珀集に清水白柳氏の句と横顔が掲載された。「白昼堂々覆面のニュース観る」

▼七面（和歌山短詩型文学クラブ）一月号で昭和四十三年度最優勝句が発表になった。○合図した音に客まで振り返り田中政夫○準優秀句、準々優秀句には、内藤幸子、増田次章両氏の作品がそれぞれ選ばれた。選者は清水白柳氏。

▼中島生々庵・小石夫妻は二月十一日から十六日まで阪急百貨店七階画廊で開かれる直原玉青画伯指導の大阪市医家余技展に出品の作品制作に余念がない。

▼藤岡花梢さん（富田林市同人）の川柳塔本社句会賞杯の永久保持を祝福して、清水白柳・八木摩天郎・阿部柳太・吉岡美房・松本吉太郎・岩田美代の諸氏が紀の川畔橋本の紀の川苑へ清遊された。

▼川村好郎氏（高石市）は一月二十五日の夜便で松山奥道後へ。松山城、子規堂を見物、道後温泉で一泊、二十七日瀬戸内海を観賞しながら帰阪された。

▼築山快夢起氏（ホノルル市同人）から、「厳寒の内地の昨今如何でしょうか。その後小生の指先の「ふるい」は服薬のほかに西式温冷浴（脚部）と毛管運動、食事などによる生活の故幾分快方に向い執筆の調子もまたよろしいようです。

▼伊志田孝三郎氏（岡崎市）から、立春大吉のご挨拶を頂戴した。「二月の陽小鉢の闇の置きどころ」

▼山田季賛氏（高槻市同人）は一月一日、三日、十五日と道成寺、橘寺、飛鳥寺、光明寺、瑠璃寺などを巡拝昨年十月一日から初めた新西国めぐりを完了させられた。一月二十五日は山陽新幹線神戸工事区のトンネル工事見学、習二十六日は天王寺鉄道局川柳会二十周年川柳大会に出席された。一月三十一日には茨木電報電話局へ出張、番傘同人の西村芳川氏にご指導を願って大助りをし、川柳のよしみを大いに感じられた。

▼堀江芳子さん（島根県）は、夫君正朗氏が毎年路郎忌に上阪出席するので、早く健康をとり戻し、共に大阪のお仲間にお会いしたいと念願されている。盲目の正朗氏は生々庵主幹のBK川柳の時間になるとラジオにしがみついていられる由

▼自選作品集「吉備団子」第十九集が昭和四十四年一月二十六日岡山市津島二五四一川柳岡山社から発行になった。参加者三百四十四人の自選句集。編集後記によると、昭和二十四年、浜田久米雄さんの発案によって、句集「吉備団子がこの世に誕生した。」とのこと定価三五〇円、送料十二円

▼八木千代さん（米子市）は大万川柳会の昭和四十三年度の第一位となられ二月二十三日の第十六回大会に招待されたが、都合により欠席のやむなきになったとまたの機会を一同お待ちしています。

▼橋本緑雨氏（本社参事）は血膜炎で左眼失明のため歩行ご困難とのこと、ご自愛専一に。

▼備前川柳社新春句会が一月十二日開催。

▼時の川柳、一月号の「新春放談」に、四十三年度を回顧した発言の中に、「句集としては藤村青一氏（高鷲亜鈍）の異色の句集「白黒記」に肺腑に食い入るような強い印象を味わった。「白黒記」と他の句集を比較すれば、印象の点では失礼ながら総じて凡調だったように思う。（永井英利）本年度の東洋樹川柳賞の候補者を〝定金冬二氏〟や、アメリカまで川柳行脚に出かけた〝大森風来子氏〟のほかに「白黒記」の高鷲亜鈍氏を推す発言もあった。

▼杉本辰一氏（元不朽洞員）は一月二十六日に大阪桃山荘で開催された全日本標語選手権大会に優勝。準優勝は安部巽氏（元不朽洞会員）なお一三夫、庸佑、奈良子諸氏も出席して上位をしめられた。

▼本社在阪役員の新春懇親宴を一月二十八日開催。

▼橘高薫風は二月十一日から北陸山代温泉へ。

▼服部十九平氏（参事）が二月二十五日交通事故で急逝された。謹悼。

新同人紹介

藤井春日（ふじいしゅんじつ）

—素身郎・一三夫推薦

本社　二月句会

会場　以和貴荘

六日　午後六時

二月には耐寒句会というのをやったものだが、暖房というありがたいものができて、耐寒句会などというものは、もう死語に近いものになってしまった。

暖い会場で至れり尽せりだが、作句のきびしさだけは忘れてはならない。梅志氏がよく云われるのだが、選者のきびしい眼光を見ると、この人になら句を任かせても安心だ。と思うのだそうだ。だから選者の選句態度も、その目つき、からだつきから点がつけられそうである。

柳話初登場の薫風氏は、真向から柳論をブッつけて立たれた。〝うがち〟の句を川柳の生命として故路郎先生をはじめ、路郎門下の逸材の名句を数十句よみあげ、伝統を守る叫びは、そのおだやかな口調の中に、ピシピシと音がするようであった。

天位の常連、水客氏や芙巳代さんのほかに初出席の寿子さんなど、いつもと違った顔ぶれが堂々の進出だ。新風とはこういうときに使うコトバであろう。

この盛り上がった二月句会に、川柳塔社の係りの人が不在で、句箋の置き場所などが分からず、不手ぎわのあったことを出席者の皆さんにおわび申します。

毎月新しい方が何人か出席されるが、古い方もドシドシ顔を見せてください。

一月句会に引きつづき国鉄旋風で二月句会も正本水客氏が月間賞を獲得された。

和を以って貴しとする、この以和貴荘は川柳塔社のイメージそのままの感が深い（F）

（河井庸佑整理）

出席―喜酔・瓢太・幸子・寿子・鳥荘・村雲・大吉・万的・水客・笑痴・夢虹・誓二・金三・鶴声・静馬・弓彦・天笑・一栄・つき子・形水・千里・トメ子・義英・いさむ・千梢・庸佑・吸江・花梢・千万子・滋雀・一舟・柳志・綾女・柳宏子・一扇・鬼遊・静歩・凡九郎・功雄・凡吉・小松園・芙巳代・多久志・白柳・生々庵・一三夫・清人・季賛・史好・富久一・六竜子・宣介・天樹・野迷路・柳太・言也・太路・喜風・肖二・菁風・薫風・文秋・与呂志・葉子

席題「ボス」　　**海士天樹選**

ボスが居て破産の誠意ぐらつかせ　喜風

歯が立たぬ相手と分っていてもボス　弓彦

ボスの出る幕を包んで黒い霧　滋雀

ボス的な存在ですと通知票　庸佑

うちのボス言い訳もせず泣きもせず　凡吉

ボスの子へ師として悩む日が続き　富久一

結局はボスのとこまで手がのびず　柳太

ボスの顔何度も立てて小さく住み　綾女

罵倒されてもやっぱりボスの道がある　幸子

ボス猿の眼が人間を射すくめる　水客

もうボスも限界を知る世の流れ　小松園

一と皮を剝げばボスにもある温味　滋雀

大ボスの過去へ楯も派手に立ち　天笑

義理人情ボスは涙をつかいわけ　生々庵

さすがボス御自分だけは逃げはった　凡九郎

同じことするならボスになってやろ　柳宏子

うちのボス満一才でかきまわし　太路

孫抱いてオンチのボスの子守り唄　花梢

骨っぽくボスに挑んで見込まれる　富久一

鍵かけて孤独の城にボスがいる　静歩

チンピラはすぐボスの名をちらつかせ　多久志

人間のボスは一番先に逃げ　弓彦

ともかくもボス言いなりになっている　季賛

下駄はいてボス凡人に戻りたく　水客

見忘れた顔へもボスは如才なく　白柳

非難されてもやっぱりボスになりたがる　幸子

後輩にボスと呼ばれて親しまれ　清人

要領のよいのがボスの気に入らず　天笑

負けぬ気が幼稚園からボスになり　文秋

グラス破り何かわめいてボス孤独　一三夫
片言のボスが茶の間を湧きたたせ　六竜子
いつも手を汚さないのがほらボスだよ　芙巳代
真っ四角に座ってボスが悲しい日　六竜子
子供等にもボススラムの子ませる　六竜子
七十のボス赤ネクタイを締めている　薫風
犠牲のままで消されるボスとなり　静歩
影のないことに気付かぬ街のボス　芙巳代
ボスの眼に積木くずれるのが見える　水客
ボスきょうは咳のよく出る会議室　天樹

席題「身振り」　神谷凡九郎選

拒絶する身振りにしては艶めかし　形水
喋るより身振りの方がよくわかり　柳宏子
後ろから身振りを真似る面白さ　白柳
修繕のきかぬ身振りをひたかくす　水客
過ぎ去った愛だと判るその身振り　小松園
こんたんを素振りに出さぬ素振りなり　宣介
身振り程派手な女で無い構え　与呂志
身振り手振り言葉が通じたとはみえず　千里
意識せぬ身振りやっぱり母のもの　一栄
駆みな動かし熱の入った指話　柳宏子
思惑の当った身振りかくさない　水客
性あわれ身振りの炎燃えつきず　天樹
身振りオーバーじんにくさもふりまわし　生々庵
つじつまを合わす身振りがずれている　花梢
オーバーな身振りも外国じこみです　つき子
身振りまでまねてお隣りをいいらし　生々庵
喉までの言葉が出ない子の身振り　形水
ガラスの向うでパントマイムの別れ　天樹
ゴーゴーの身振りで背中洗ろている　一三夫
国訛り手振り身振りの唄にとけ　静歩
嘘まぜる話しで身振り多くなり　小松園
身振り素振り女心のデリケート　多久志
下戸は下戸なりの身振りが板につき　白柳
八百長と見せぬ身振りでまくし立て　生々庵
そしらん身振りで知っている悩み　花梢
身振りまでしたのに居留守顔を出し　柳太
劣等感むき出しにして握手する　水客
秋風へ身振り豊かに舞う尾花　一栄
身振り愉しく唖は恋のことらしい　六竜子
方言へ身振り手振りが通じない　凡九郎

席題「世話好き」　丹波太路選

世話好きの声は廊下でもうわかり　与呂志
世話やきの眸に適令期と知る娘　六竜子
世話好きな夫三号までも世話　肖二
世話好きがエプロン掛けやって来る　弓彦
世話好きの伯母を娘はけむたがり　笑痴
世話好きにまんまと片棒かつがされ　誓二
世話好きの息子の嫁がまだ出来ず　千万子
仲人の数を自慢にして暮し　文秋
愚痴ばかり言うてて世話がやめられず　文秋
世話好きの余得病気にかからない　形水
世話好きが時計のように顔を出す　花梢
めんどうな事に世話好き煙たがれ　生々庵
蜘蛛の巣のように世話好き網を張り　天笑
世話好きの手柄知事さん呼んでくる　形水
世話好きの癖に人には好かれてず　白柳
断りが下手でお世話が好きにされ　千里
世話好きがいてシャボテンを又枯し　柳志
世話好きを買われ万年幹事なり　飄太
行き過ぎの世話と女房から抗議　村雲
世話好きも議員になれば働らかず　一三夫
寝返りばかり打って世話好き寝ていない　水客
世話好きが二次会までも世話をやき　一栄
世話好きがいて恙なく旅終わる　柳宏子
世話好きが今日も黙って身銭切る　言也
世話好きが犬の薬を持って来る　柳太
世話好きで動ける体うらやまれ　一舟
世話好きの帰った後で舌を出し　寿子
まだ凝りもせずに縁談引受ける　太路

兼題「大学生」　児島与呂志選

警察より精神科へ大学生送り込み　生々庵
大学生ですかと下宿断られ　生々庵
短大が邪魔して婚期遠くなり　笑痴
うちの子も大学生でと不安顔　正朗
大学生の子を持つ親にして同じ　日出雄
大学へ通らんでよかった負け惜しみ　芳子
東大のスト大学の株下がる　柳宏子
プロの水甘くなかった東大出　清人
大学生口一杯の事を言い　花梢
巳惚れをひがんでかためた大学生　生々庵

時々は講義聞いてる大学生　庸佑
うちの子はそんな子でない大学生　葵水
人間を無視するそれが大学生　与呂志

兼題「裏方」　　傍島静馬選

殺される役に裏方狩り出され　葵水
裏方も兼ねて一座の旅回り　芳子
裏方の苦労みのった今日の出来　正朗
析がはいる裏方たばこ消して立つ　旅風
ご祝儀がきいて裏方低姿勢　阿茶
ご最貧の客を裏方よく覚え　言也
蒸しタオル持って裏方袖で待ち　吸江
なり切った裏方さんの顔のしわ　静歩
裏方でよし一生を賭けた腕　滋雀
裏方へも祝儀絶やさぬ如才なさ　瓢太
お師匠を裏方にする舞ざらえ　太路
裏方で一生暮らした撥のたこ　章雅
裏方も徹夜初日を盛り上げる　水客
裏方の頭にも散る紙吹雪　柳太
閉場るまで裏方電報知らさない　小松園
裏方が客にまぎれてきく批評　野迷路
裏方へ祝儀の届く初舞台　柳宏子
一本の釘にも裏方気の疲れ　宣介
わが事のように裏方拍手聞き　一舟
先代の声と裏方まちがえる　千万子
裏方五十年人間国宝となり　多久志
裏方の目もうるんでるアンコール　花梢
雑草に似て裏方は忘れられ　一三夫
裏方の手は雨になり雪になり　文秋
表彰をされて裏方陽が当たり　柳志
薄暗いとこで裏方見えを切り　生々庵
裏方にいたわられてる馬の足　千万子
裏方の機嫌舞台の出来不出来　静馬

兼題「ガラス」　　阿万万的選

倖せはグラス触れ合う音のなか　芳子
ホームでの別れ非情な二重窓　一二三
ガラス越し地球を写す宇宙船　正朗
風呂のガラス戸大胆なシルエット　タカ子
ガラス越し見る海底の美に魅かれ　礎山
顕微鏡オブエクトグラスをまずかし　阿茶
春一番ガラスの外に猫の恋　双楽
剝製と知りつつ恐い虎珀の眼　葛城
親呼んで来いとガラスは割れたまま　六竜子
指がガラスになった少女裸身を恥ず　夢虹
特急の別れガラスを叩くだけ　清人
売っていたように切れないガラス切り　鬼遊
裏窓は当分テープでついでおき　静馬
ガラス屋がもてば素直なガラス切り　柳志
ガラス越し泥まみれの児が戻る　鶴声
二人の顔夜汽車にたのし窓ガラス　生々庵
野次馬も見ているビルのガラス拭き　庸佑
ガラス汚れしまま平和論続く　芙巳代
口笛でガラス拭いてる空の青　言也
ひな祭り子の手に光るガラス玉　大吉
イミテーションやで彼氏がくれはった　天笑
窓割ってノッポいちばん叱られる　静馬
教会のステンドグラスに夕陽射す　肖二
破れないガラスのように女だまりこむ　水客
店の間とうちらを仕切る刷ガラス　形水
ガラス破片を遠巻きにする野次の波　柳太
火にもかけられまロマンのないガラス　凡九郎
窓ガラス拭いて駅の名たしかめる　六竜子
食堂車ガラスのチョコで旅の味　生々庵
拭いて拭いてガラスの城にひとりぼち　静歩
児の指にはがゆいガラスの裏のハエ　村雲
透明のガラスも邪魔な山の宿　一舟
見るだけの仏像となりガラスはめ　一舟
浴室のガラス見つめてけものめく　白柳
ガラス吹く男の顔に嘘がなし　水客
ガラス越し女は意識して入浴　肖二
未熟児の命をつなぐガラス箱　文秋
放心の瞳はガラス戸にさえぎられ　柳宏子
けがなしと見てから叱る窓ガラス　千万子
スリガラス湯殿はママのシルエット　村雲
温室の季節をつくるガラス窓　義英
冬陽まともガラス素直に暖まり　季賛
パケスカーフガラスの向うにある神秘　万的

兼題「化ける」　　正本水客選

化ける時人は化粧をすると言う　旅風
入れ物が化けて年期の品が売れ　百水
化かす顔化かされる顔欲があり　一二三
ハイドからジキルへ化ける闇の私語　日出雄

信じ切る瞳に 化けの皮ぬいで詫び　礎山
桃割のお化けスラックスで逃げまわり　まさひろ
歯の治療化けて出るような口を明け　葛城
忠実な社員に化けてスパイする　阿茶
衣類から人工肉まで石油化け　章雅
化けて出てやると女の捨てぜりふ　葵水
ある時の情婦才女に化けていた　公輔
今頃は何に化けたか三億円　葛城
新郎新婦神を恐れぬ化け衣裳　生々庵
化けるのに馴れて女の性あわれ　与呂志
幽霊に化けてシーツが叱られる　鬼遊
化けの皮はげてタコ焼たべる顔万的
ご臨終化けて出るとはおっしゃらず　静歩
化けて化けて化けて人間がない　凡九郎

子狸の女に化ける顔でなし　柳志
エリートが暴徒に化けるヘルメット　綾女
善人に化けバイブルの頁繰る　天樹
化けるのに手鏡パッとよく動き　凡吉
群衆心理世論は変な方に化け　万的
執念に化けた女の目が怖い　弓彦
化けてやるせりふにしては太り過ぎ　一舟
化けそこなって鬼の面を持っている　芙巳代
チンドン屋女装のままでコップ酒　吸江
ガム風船に化けておつりが帰って来　鬼遊
化けるにもあの手この手が有ると知る　季賛
化けそこねたことを相手のせいにする　柳宏子
お化けごっこ頭からシーツをかぶるだけ　一栄
お白粉の下にお化けの自己嫌悪　六竜子

化けの皮はげたも知らぬ長口上　柳宏子
探訪の税吏ひやかしの客に化け　儀一
石油の化けた肉とは知らなんだ　天笑
うますぎる話化かされまいとする　千梢
肩まで脱いで女に化ける楽屋の灯　六竜子
化かされた歴史でもよし日本人　一三夫
化けて出るタイプではない肥満型　文秋
美粧院出たら声まで化けていた　天笑
神通力失わない尻尾出したまま　柳宏子
変身という化け方で世をわたり　一三夫
華れいなる化身蝶々は過去を断つ　芙巳代
化けてから落語のキツネ酒も飲み　柳太
もとに戻れなくなったたぬきの子夕焼けに涙　夢虹
まあおきれいなお見事に化けよった　生々庵
男に化けてものど仏がないぞ　白柳
貝の精化けて出そうな埋立地　静馬
商品が瓦れきに化けたあわてよう　庸佑
黙秘権東大生に化けた奴　白柳
いつも微笑仮面かも知れないよ　芙巳代
人生に化ける余白をとっておく　水客

雅号ぶっちゃけばなし

いさむ きくた

・菊田いさむ・

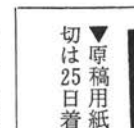
（69）

昭和二十八年四月、当時職場の上司だった黒川紫香氏のお誘いを受けて、川雑池田支部の句会に出席させていただきました。これが私の川柳愛着心の第一歩でした。先輩には竹内ゆずる、竹内圭三、小池しげお、永藤弥平と云う阪急社員の方々が活躍されて居られましたが、雅号は皆さん本名そのまま、私も本名のままで、川柳一辺倒へ走り出したわけです。しかし性格と同じく、名前負けしているのか川雑、川柳塔と歩んで参りましたが、弱点の多い私には未だ後世に残りそうな句は生まれそうもない。雅号の通り勇気を出して、一路邁進、命ある句を残したいと思っています。

私鉄阪急社員（四十一歳）

若本多久志川柳句集
「老いの坂」
序文、中島生々庵主幹。　B6版美本
実費四五〇円　送料七〇円

若本多久志著・川柳句集
「親ごころ・子心」
実費二〇〇円　送料六五円



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

玉造川柳会（大阪市）　西出一栄報

秋晴れの野道を行けば唄が出る　綾女
スモッグにも負けぬ銀杏の実のわわ　頂留子
婦人科が病気でないと笑いはり　一舟
うち中の笑いが窓の灯に溢れ　恭太
まだ食べはりまんのかと顔をみられる　古方
上品な料理へ食いい気の物足らず　弓彦
年頃の娘よく食べよく笑い　柳宏子
靴揃えてあなた帰りは何時です　文秋
やってしまう娘に何もかも揃え　あいき
何もかも揃えて求婚待つばかり　竹青
穴にでも這入りたいはとけんそん　富久一
法律の抜け穴知ったふところ手　金三
穴あけた養子へ想う娘が不憫　照一
鍵穴を覗き事件に巻きこまれ　鬼遊
裏切られポッカリ胸に穴があき　葵水
高給優遇そこに女が堕ちる穴　はじめ
大穴を狙う落ち目の日の無口　章雅
コップ酒心の穴は埋められず　滋雀
それて来た話題に司会つりこまれ　葵水
共稼ぎしてから話題通じ合い　虎城
次々と話題を変えて帰さない　静馬
目くばせの妻へ話題を急に替え　六竜子
話題ふと気まずいものにふれにけり　凡九郎
クラスメートとはずむ話題に妻若し　智子
持ち寄りの話題で老いを温めあい　君子
長旅の話題もつきて丁度下車　貞山
話題まだ尽きぬお昼の市場籠　井平
カマトトになって話題へ無表情　一栄
遅く来て話題を変えたのを感じ　白柳
甘やかされた母を恨むと嫁き遅れ　風仙洞
男まさりと云われ甘える術忘れ　清子
憎い奴恩赦に甘え出所する　育園
母にまだ甘えて内緒の恋があり　小路
好意にも甘える尺度胸にもち　双楽
里親になって他人の子甘やかし　肖二
浮雲のあれが父さんお母さん　静歩

南大阪川柳会　金井文秋報

余裕ある生活がさせる倦怠期　滋雀
ふところの余裕冒険したくなり　形水
合鍵を素直にくれて怖くなり　弓彦
欲張らぬさかいにできた余裕です　古方
眼のやりば困り足元じっと見る　綾女
倒産のラッシュの中を泳ぎ抜き　文秋
足元を軽く見すぎて客逃がし　生長
カルテ書く医者の無口が案じさせ　金三
神様のように素直でだまされず　一舟
足元は社長を送るまでたしか　吸江
ただ一つ素直だけが取柄なり　双楽
新らしい靴足元が気にかかり　肖二
奥さんは余裕残してもう産まず　喜風
カルテとは別の病状聞かされる　あいき
揉手もう足元見抜いた話する　凡九郎
りちぎ者素直に減った靴で知れ　県吉郎
半日の園児お迎え自家用車　はきだめ
くたびれたカルテに明らかにきざし満ち　君子
当てあって素直に母の叱言聞き　誓二
吊り皮に今日の疲れをささえられ　智子
半日の息抜き孫の馬になり　千梢
スモッグが晴れて素直な日が当る　虎城
他人さんの切符へ半日列ばされ　静馬
素直さに本当の事を告げるまい　葵水
足元のニュース遠くで聞いて来る　一栄
疑いを打消すゆとりまだ残り　千代
大それたこと考えた小半日　白柳
ばら寿司へ半日かけた母の味　章雅
素直さに取り残された行かず後家　喜仙

和歌山短詩型文学クラブ　葵水報

初空の明るく凧ゆうゆうと　みさを
明るさがとりえの妻に救われる　次章
一級も特級の味明るい日　繁治
バレたのも知らず明るく来る夫　政夫
小晦日明るい寝顔日本髪　重治
死ぬことを軽々と云い明るい娘　智恵女
七福神紅一点の宝船　富子
弁論会優勝はまた紅一点　みや子
紅一点クインの如くかしづかれ　一光
クラス会紅一点が子供抱き　己三彦
マーケット伊勢海老だけが姿なし　蘇風
恋を知り何もかもが映えわたり　泰子
苦しさも明るい子供の声に消え　みどり
紅一点おくめんもなく酌みかわし　さち子
玄関に威厳を保つ伊勢の海老　栄衛
腰痛は海老に寝ろよと医師が云い　健一
角曲げて海老も目出度き膳にのる　城石
海老おどる南無阿弥陀仏舌づつみ　五月
海老むいた指へ盃持たされる　葵水
紅一点十点ほどのかしましさ　勉
踏切番天職として明るい日　公作
はからずも私一人の陳情団　三幸
紅一点挨拶代りにお辞儀する　光治
紅一点消え入りそうな気の毒さ　太茂津
底ぬけの明るさ腕に乗せた顔　生々庵

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻圭水報

清らかな献金孤児の身を守り春子
感謝して報いる献金日々果し清涼
献金にたよる政治になりさがり宏子
献金をしに来た事務所の不愛相金三
献金の使途が気になる金のたか圭水

大阪逓信病院川柳会　森下愛論報

初詣かねてのホテルで年を越し竹荘
初詣倖つかんだ顔で去に夏生
どう云うて拝んだんやと初詣竹青
玉砂利の音も目出たい初詣秋風郎
地図そえて遊びにこいと手紙くる蕗児
略図でっせと名刺のうらに書いてくれ愛論
山岳部独自の地図も別に持ち没食子

まるべに川柳会（大阪市）　川村好郎報

好景気救世軍の鍋に見ず泉睦
ボーナスも犯罪も史上最高で暮れ茂児
年の瀬を矢張りなんにもせぬ夫立児
いざなぎ景気歳末のぼったくり信
クリスマス商魂だけがなり立て扇里
年の暮男はとかく邪魔にされて瓢太
てこづりが入って心通じ合い幸子
十二月信号赤ももどかしく好郎

どんぐり川柳会（大阪市）　川村好郎報

旧姓を書いて歳暮のつつましく酔々
集金の歳暮を先に出して待ち吸江
また酒と妻お歳暮を喜ばず喜風
うすれゆく絆をお歳暮つなぎ止め功雄
お歳暮を撰るのに妻の智恵を借り儀一
お歳暮が戻り倒産知らされる草春
膝枕とても師走と思われず史好
お歳暮を主人は知らずゴルフ場いわを
これ限りと断り言うて取る歳暮大吉
お隣へ来たお歳暮を値踏みする真砂
六畳を歳暮で埋める暮し向き泉洋
ボーナスの額で歳暮の再検討敏雄
お返しのある歳暮には気をつかい生長
銀行のお歳暮マッチとカレンダー鬼遊
酔いつぶれ座蒲団枕でほっとかれ比呂路
汚職したあとの一号の膝枕秋水
言い過ぎた冗談酒のせいにする孝子
アイスノン温和しくする児を見つめ白柳
ささやかな善意忘れぬ歳暮くる好郎

あすなろ川柳会（大阪市）　川村好郎報

ひやかしの中から鴨をよっている青香
ひやかしの客でもほしいさびれよう瓢太
脱いでみたけれど主役にされなんだ素郎
一生を主役をたてて脇で生きゆきを
みくびられながら小さく蓄めている百酒
折詰へ紅葉が散った秋の空弓彦

どんぐり川柳会（羽曳野）　川村好郎報

未だ減らすつもりか二代目株を買い紀水
腹減って心にそむいた手がのびる広和
貯金減るピンチへ明日は明日の風吐来
催促の電話こっちも腹が立ち一治
張り合うは馬鹿らしく寄附減らし桂馬
減税の分はどこかで又とられ波一峯
少しでもへる工夫へ妻の智恵
催促をされてる方の門構えいわを
冗談の中にも催促めかしときに一光
催促に行って酒でごまかされ良行
催促も気軽に言える友の仲立女
催促が無ければ無いで気をまわし坂本
手術又催促されて眠られずくめ子
催促をしているらしい咳払い輝楽
夏祭浴衣姿で賑う西山
秋祭近づく太鼓の音せわし糸川

和気川柳会（岡山県）　藤原秋月報

旗じるしぼかして机にしがみつき胡風
釣書に遠い名士の名を借りる一風楼
誰か来て机の花がかえてあり貞子
親戚が上京の都度宿にされ艸平
共学の札に先生気を使い芳明
米過剰街の遠縁もう来ない秋月
嬉しい日机上に白菊さして待ち繁子
金貯めて親戚中から敵にされ伊久野
無理をして子の入学へ机買い恭子
親類の長老据える床柱梅泉
不慮の子の机に花束供えられ溪泉
危篤です血の濃い順にウナが飛び富士夫
豊作が米の量より質に替え梅泉
蓑虫が風に揺られて夢を見る溪泉
焦ってはいけない一服吸いつける富士夫
秋晴れの砂丘の上で背伸びする恭子
桐一葉落ちてセーターやさるこ出し貞子
植林が山の容に茂りあい艸平
浴衣着の案山子刈田に冬が来る繁子

川柳たましま　水粉千翁報

さようなら心に鍵をかける音克枝
代人という気軽さで酔うている扇水
もみじ散る思惟の極まる時散りぬ三林坊
万歳で男左遷を送られる寛子
留守訪うて庭をゆっくり見て帰り三辛堂
また逢える日まで泌み込む手の温み旭峯
ネクタイのペーソス首にぶらさがり柳子
米価には触れず精農の汗光る梁水
カラーテレビ買う相談を聞く案山子里風
さよならへひとつうなずく里の母千翁
一粒の米を流した今日を悔い秒子
さよならを明日へつなぐ友がいて八笑人
応援のママ突然に走り出し朝二

ウイロー社（ハワイ）

足音を聞いてニッコリ妻の顔内海
地下道の足音旅愁かきたてる蒼蛇楼
足音へセパートすわという構え峯園
母達者足音もまだ衰えず拝山

足音で客は女性だなとわかり　カロ女
片足で歩く足音松葉杖　河舟
こだまする我が足音へ振り返り　紅溪
足音ですぐよってくる池の鯉　紅茶
足音をひそめて見入るマイナの恋　やもり
足音で就職を知る母の勘　暁舟
踏み分ける喜怒哀楽の足の音　浮草
百年の明治の足音遠くなり　万里歩
二次会の戻り足音忍ばせる　快夢起
酔わぬふりしても足音承知せず　泉水
足音のリズム金策出来た音　柳葉

むらくも川柳会（島根県）　藤井明朗報

新顔の新風入れて小企業　孝華
新顔が主役になった酒の席　昌
新顔へ園児ライバル意識あり　正朗
新顔がマンネリズムの殻を割り　白汀
新顔のカーブを上げた販売戦　一郎
ハンサムの新顔女の的になり　祥月
新顔もお国訛りで座がなごむ　英子
新顔が小さく娘の横にいる　鶴丸
新団地新顔ばかりのが値打　遥
奇跡的写真ぼけるが親心　美栄
万に一つの奇跡にすがる親心　美栄
あきらめたる宝十年目の奇跡　芳子
捜索の奇跡を信じ雪の峰　みどり
嫁いだ娘年始に指をついて座し　清夢
松とれてからが女の年始会　加代

高知川柳社（高知市）　川竹松風報

別居して悪い女にひっかかり　純子
別居した愛の亀裂を子が埋める　美知
別居してせっせと孫を見にかよい　初美
別居した次男の嫁が気に入られ　たかし
別居して自問自答の日を重ね　紅雨
素人の商売うそはよう言わず　長子
素人はつまらぬ事に念を入れ　伊津志
修繕は素人大工で事を足し　清流
素人の柄を着てみる夜の蝶　春輝
美容院週刊誌で得た妻の知恵　勝子
汽車の旅隣りも同じ週刊誌　窓花
売り出しの顔デカデカと週刊誌　柳水
落ちぶれし身を満月に洗う　柳翠
神棚のホコリ先先代のもの　松風
全没は覚悟作句へマイペース　武司
ホステスの眼からは男金に見え　竹荘
ニヒリスト神を真っこうから否定　桂緑
髪黒き寡婦のゆくての幾山河　晴水

川柳塔松江支部　祥月報

役人の汚職次第に太くなり　唖蟬
日航のタラップ降りる外来語　光春
寝返りをして金策のつかぬまま　巡歩
役人らしくない上役の押が利き　千代
ゴーゴーを坊主も踊るクリスマス　壮樹
役人のいいとこ探すに骨がおれ　白汀
外来語明治生れの癇に触れ　与根一
日本語に訳すと分らぬ外来語　晃男
親方の勘にわかった外来語　鳳人
ライバルが先にお辞儀をしてくれる　遥児
女房の日記と残業くいちがい　鶴丸
三億円の捜査残業の灯に時雨　孤呂二
確票が寝返りを打つ投票日　祥月

備前川柳社　目賀芳月報

初夢に宝船とはついている　正州
子宝がほしい女の気もわかり　幸仙
家宝とは知らず値ぶみをしてしまい　芳月
性の危機女宝をぼいと捨て　胡風
御先祖にすまぬ家宝を差し押さえ　秋月
素直さと言う心の宝持ちつづけ　飴ン坊
子宝に恵まれ名前を又違え　芳明
小さいが稲の穂宝のように見え　柳子
腐る程宝をもって病むベッド　伊久野
宝石はいらないあなたの愛がほし　一声
宝くじ夢見がようて又も買い　水仙
石が出き何がまだ出来ぬのであせり　久米雄

○

月の道月の童話で子と帰る　飴ン坊
勇退がゆずる花道振り返り　芳明
火葬場へ行く道誰も散歩せず　秋月
近道をして手間取った十二月　芳月
猫車押すふる里の道曲る　胡風
人生の坂道自分だけでない　万女
人生の道へ試練の坂があり　一声
ご詠歌が先導してる遍路道　伊久野
山奥で迷って頼りの道しるべ　幸仙
道問えばどこから来たかと先に聞き　柳子
里の道歩く新妻うれしそう　初美
親父とは違った道を行くせがれ　水仙
何もかも呑み込むつもり印を押し　溪美
印鑑を持って来るのは女秘書　夢中
印鑑は払い戻しのわけを知り　久米雄

川柳たけはら（竹原市）　山内静水報

運動会やっぱり秋が来たんだな　清子
クッションのきいたイスで昼寝する　洋子
キッスシーン三ツの坊やが目を閉じ　法子
エビカニにどこか似ている全学連　孚彦
バテッ子が一人背中を向けて食べ　ふみこ
声もなき柩の上にプラモデル　正信
せめてもの思い出恋と名づけたり　大陸
山鳩よ思いのだけを配こんでおくれ　のり子
何事もなかった顔でお茶をたて　鬼焼
ウィンドで姿直してからはいり　泉
肩に来て邪心を覗く赤とんぼ　操子
盛り場をぶらつき安堵の夜を眠る　清海
気象台ジグザグコースにしてやられ　英詩
欲のないお方と妻が口を出し　清太郎
憎いほど肥えてらっしゃるとは患者　延子

犯人が同姓朝の茶がまずい　菊酔
静けさは孫の帰った午下り　治夫
宣伝が行き届いている社の景気　季賛
マイペースマイペースなり祝い酒　芳則
二昔言うまいいまの幸でよし　峰泉
ハンケチの白さへ今日の幸思う　笑子
誘惑に負けまいとして眼を閉じる　不動
水菓子の涼しさ今日のお茶の間に　澄
むすび目が解けて自由へ浸り過ぎ　静波
虚栄と言う倖わせに満足りる日　文晴
俺は病人だぜと都合の悪いこと　蘭幸
消えたゆめ追えば気になる事があり　雅鳳
仔犬チョロチョロ嫌がる子へ甘え　そのみ
言い負けた日の虚しさと安らぎと　菁居
良く吠える犬に留守番任しとき　美佐雄
せわしさは二人で出向く趣味の朝　貞子
石庭と対話無心のほかになし　不朽
ピエロ今日だるまの如く壁に向く　政己
虫が鳴くあくび途中で止めて聞く　静雨
何くわぬ顔で確かに知っている　静火
腰かけたままで不安な夜が白み　房子
過疎地帯小山羊の声も細りたり　松緑
山に立つ時人間に満つゆとり　甦光
待つだけは待とう相手の身にもなり　天石庵
立秋と聞くそういえば虫の声　紫苑荘
夏終る手拭にあるわが匂い　不二也
胃カメラに貧相な胃をのぞかれる　笹舟
一対一で話せばいい人ばかりなり　静水

藤本礎山報

ふじかげ短詩睦会

実

目を伏せる人を避けよと教えられ　婦美子
なおりたい風邪の注射へ目をつむり　昌代
じっと見る父の目秘密をみな言わせ　万里
不意打のフラッシュ一しゅんぐらし　国子
秘めている心へ親父の鋭どい目　
何百年目をつむってるロダンの像　敏彦

怒ってる親父の目玉笑ってた　美代
つながれた牛の目玉がギョロッと見　久美
アイシャドーの目に腕白が逃げて来る　二朗
柄を見る目は父ちゃんの方がよし　佐知子
目を閉じて過去の戦を語る父　敬子
お祝へウインクだるまが目をひらき　由起子
それからはまかせておけと目が語り　勲
ベトナムを世界の人の目が見つめ　きち
ただじっと見る父の目が恐ろしい　季代
目にふれぬところでマンガ面白い　勝子
目の悪い伯母に心を見透かされ　美弥
父の目をまともにうけて座す自信　香絵
父の目が見て居て呉れる海水着　恵子
見えていた記憶を母は句につづり　和宏
台風の目を科学陣追いかける　末子

以上　小中学生

お茶席へ油断のならぬ目が坐り　多鶴子
目を見張る色を十代着て歩き　一稔
目にものを見せるつもりが事故越し　透風
目は活字追うて気になる嫁話　喜久
妻の目に行き過ぎそっと押えられ　千重
栄転が悲しい泪の目が送り　加代
愛し合う目と目が合って席を抜け　千鶴子
宝石店一文なしで見てまわり　十三子
ほほえんで嫁がすつもりの目へ泪　総
好きですと云えぬ泪の目が見詰め　一代
目と鼻の近さへ見栄が呼ぶハイヤー　英子
アイシャドーの目が来て明治ぞっとさせ　政子
目薬の泪と知らず母は哭き　照夫

整形外科親に似た目が気に入らず　慎利子
目が綺麗だから取引すると決め　利子
嘘をつく事がすまない綺麗な目　長男
宝石のように輝やく目で見られ　葉舟
しっかりと見返す瞳信じたし　征山
大目玉食ってそれから意気が合い　忠志

ピカソの絵みんな目玉がひんまがり　鎖也
負けぬ気の指が目ほどに文を読み　佳女
白い目に耐えた日もある寡婦の道　貴恵
目を伏せて耳まで染めて嬉しい日　和久
亡き父母に逢いたいときは目をつぶる　勝久
信じ切る約束娘の目が美くしい　礎山

川口弘生報

城北明朗会

校長の不運はAの籍があり　弘生
二十年振り校長の手の小さいこと　三十四
校長は日本一の良い子持　久子
校長の目刺が焦げる分教場　一乃字
校長の名前も知らず妻任せ　多幸
袴を脱げば校長シブイのど　漁人
校長も我が子の教育ママ任せ　繁子
葬儀屋と校長ばかりモーニング　光武亭
校長が女になって花が増え　鉄舟
風雪を越えて校長らしくなる　茶々坊
校長の髭に浮気があったとは　洛酔
教え子の名と共に校長の名が上り　行有
校長の歴史を破り女史の椅子　奈良子
退職の校長見送る新校舎　ムラエ
校長の手袋白い卒業式　一休
学閥がたたり校長待った食い　濁水
栄職の校長朝は早く起き　芳
床の間の虎珍客の背を狙い　本蔭棒
馬肥えて懐やせる秋が来た　一登
寝たきりの中風次場所を待つ永さ　生仏
孫娘婆の手を引く敬老日　聖川
ダム出来て橋だけ立派な道となり　よし彦
梯子酒景気よく見え火の車　柳生
老人会若き思い出語り合い　ふさ
老いの身に心鞭打ち実行す　キサノ
おとぼけに抗議ピントが狂いかけ　馬頭

▼佳句だけを発表することになり、各会で選をしてから送って下さい。（係り）

盲目の詩人・高鷲亜鈍著

句集「白黒記」

一冊　七百円（送料共）

名著「詩川柳考」の高鷲亜鈍氏の句集が出ました。題字は小生宛に来た手さぐりの便せんから抜いたもので句集『白黒記』と読んでいただきたい。（一三夫）

本田恵二朗著　「砂の足跡」　送料共　百　円

中島生々庵著　「川柳講座」　送料共　五十円

本社三月句会

日時　三月六日（木）午後六時

会場　以和貴荘（いわきそう）
阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

兼題　柳話　若本多久志
「抜けがけ」　金井文秋選
「インテリ」　菊田いさむ選
「別室」　八木摩天郎選
「神経」　川村好郎選

席題　三題（題と選者は当日発表）各題三句

会費　二百円

★投句だけの方は切手五十円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話大阪㈣3985番

4月の兼題　「イメージ」「後」　「釜」「覗く」「首」

五月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵　選

近作柳樽（10句）　菊沢小松園　選

課題吟（各題5句以内）

「姿」　三井酔夢　選

「沈黙」　田村藤波　選

「団地」　小西雄々　選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

六月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵　選

近作柳樽（10句）　菊沢小松園　選

課題吟（各題5句以内）

「テープ」　竹内圭三　選

「貸し傘」　岸南柳　選

「口先き」　尼緑之助　選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

定価　百四十円（送料六円）

半年分　八百七十円（送料共）

一年分　千六百八十円（送料負担）

昭和四十四年二月二十五日印刷

昭和四十四年三月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎

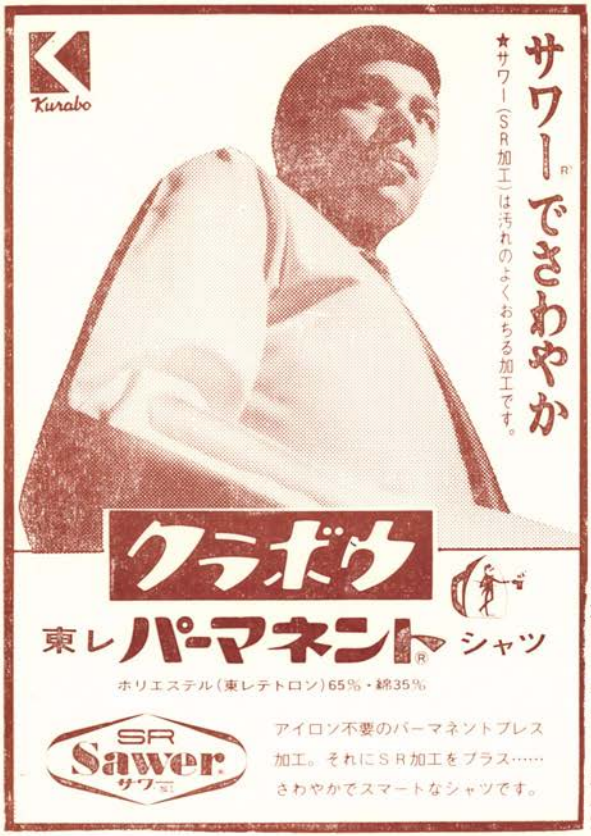
印刷所　大陽印刷株式会社

郵便番号　五四二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
発行所　川柳塔社

電話大阪㈣二七一―三九八五番

振替口座　大阪・三三三六八番



・ペンペン草・

★本号から「2DK」をやめて『ペンペン草』にしたが、別にペンペン草が生えたわけでもないし、また、そんな弱気も起こしてはいない。ただ、ペンにひっかけた草稿ぐらいの軽い気持ちでかえたのである。

★はじめは自柳氏と2DKに住む、といった心づもりで、2DKの表札をあげたのだが、多忙の自柳氏が送稿してくださらないため、こんなカタチになってしまった。

★後記といえば、もう十何年か前に、路郎先生が九州だったかへ旅行された時、書いて送る時間がないからキミが書いとけーというおたよりをいただいた。そのころの後記のカットは、カエルがカサにとびついている凸版で、先生はそれをひじょうに愛されていた。しかしボクは別の凸版を使った。

★本になってから、路郎先生が、ーなぜ、あのカットを使わなかったかーとおっしゃった。ボクは憶面もなく一番傘にとびつくカエルなんてイヤですねーと申しあげたら、先生は一瞬、イヤな顔をされたが、それっきり廃刊になるまで、あのカットはついにお使いにならなかった。

★余談だが、こんなボクなのに、故水府先生には可愛がっていただいた。水府先生個人で寄贈されていた刊行物が二十数氏あるそうでそのなかにボクも入れてもらっている。ありがたいことだ。

★一日も早く、百ページ以上の本の後記を書いてみたい。番傘さんのようなネ。

★椙元紋太先生から賀状をいただいた。ご不自由な手で書かれたもので、これはボクの家宝の一つとしておきたい。裏は印刷、表は代筆というテもあるのに、ほんとに心のあたたかい方だとおもう。

★霞乃先生が〝川柳日記〟を随時おくってくださることになった。ウチはやはり霞乃先生の玉句がないとさびしい。

★女流作家から男性の選者へ―を特集した。川柳界にはまだ女性上位時代が来ていないようである。桃の節供(せっく)は、おだやかでよろしい。

★故阿部佐保蘭氏の遺稿やまだそのほかに多くの未発表の原稿が眠っている。気にはなっているが、今しばらくお待ちください。

★各地柳壇も消化しきれなくなっているが、雑詠が「川雑」時代より約二倍にふえているからである。とにかくふえているのです。

☆ボクの仕事は、一日でも早く本を出して、一人でも多くスターをつくることにある。

(不二田一三夫)

昭和四十一年 一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十四年 二月二十五日 印刷
昭和四十四年 三月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔 三月号

定価一百四十円（送料 六円）

明日のために
今日ものむ
ポポンS

シオノギ製薬

仲代達矢

黒潮おどる 紀州路へ

＜白浜ゆき＞ なんば発時刻
急行 きのくに5号…(毎日)…12時51分発
急行 きのくに10号…(毎日)…16時40分発
急行 きのくに6号…(土曜)…13時13分発
＜白浜・新宮ゆき＞ なんば発時刻
急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発
夜行 直通列車…(毎日)…22時15分発
●きのくに5号は 座席指定券を 他の列車は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車